

艶笑喜劇 全四幕

『道頓堀心中冥途往来』

2018 / 6 / 5 改訂 陸奥 賢



※「道頓堀心中冥途往来」は クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンスの下に提供されています。これは原作者のクレジット(氏名、作品タイトルなど)を表示することを主な条件とし、改変はもちろん、営利目的での二次利用も許可される最も自由度の高いCCライセンスです。

## ■主なあらすじ

舞台は大坂・冬。宝永年間（宝永7年・1710年）。奉公先の家あまりにも仲が悪く、一緒に添い遂げることができないと悲嘆した六兵衛とお妙は心中を企てる。フグを食べて、道頓堀川に飛び込んだが、結局、お妙だけが死んでしまった。葬式をするお金もないので六兵衛は友人の僧侶の天善に供養を頼む。天善はしぶしぶ葬式を引き受けるが、じつは女性の死体の髪の毛などを遊郭に売って儲ける悪徳僧侶だった。

そんなことを知らずに、お妙の髪の毛を買った南地の遊女の和泉は、ひよんなことで六兵衛と出逢う。六兵衛は妙に和泉の髪の毛にこだわる。気味が悪いと思つた和泉は天善に会つて髪の毛の主は誰か？と問いたですと、じつは亡くなった恋人のお妙の髪の毛だったと告げられる。和泉は六兵衛のお妙に対するあまりの恋の一途さに惚れてしまう。なんとかしてお妙を忘れさせることはできないか？と天善に相談すると、お妙の死体を動かして、幽霊として化けて出して、六兵衛に新しい恋をするようにけしかけようとする。六兵衛はすっかり騙されて、お妙を忘れることにし、新しい恋人として和泉と懇ろになる。

ところが、六兵衛がお妙を復活させようと用意していた反魂香が効いて、お妙がほんとうに幽霊として復活する。幽霊となったお妙が六兵衛を見つけると、なんとすでに新しい恋人・和泉がいた。復讐に燃えるお妙。そこで和泉の身体に乗り移って、遊びにきていた天善を誘惑する。六兵衛は、新しい恋人・和泉と天善の、我を忘れる激しい愛の交わりを見ているうちに、ついに逆上して、天善を刺し殺してしまふ。六兵衛が天善を殺してしまつてから、お妙は自分のしたことの罪の重さに恐れ慄き、和泉の身体から離れる。六兵衛と和泉の恋に嫉妬して、そんなイタズラをしてしまつたと告白するが、六兵衛はその気持ちはわかるが、死んでしまつたものとは一緒になれないとお別れをいう。

お妙も諦めて、六兵衛と和泉の恋を許すが、天善を殺してしまつたことの罪を償わないといけなない。奉行所に名乗りをでるしかないと意気消沈していたところ、天善がいきなり幽霊となつて復活。じつは天善にも反魂香が効いていた。天善がいうには、じつは幽霊のお妙と愛し合つた結果、あまりの快楽で、心臓発作ですでに死んでいたと告げ、六兵衛が刺したのは、無効で殺人には当たらないので安心しろという。そして、変な出逢い方だが、お妙という素晴らしい女性と出会えた、これから二人で成仏するという。六兵衛と和泉が合掌する中、天善とお妙は、二人で手に手をとって、あの世へと旅立っていった。

## ■登場人物

①六兵衛 道頓堀・大和橋北詰にある炭問屋「黒金家」の手代。25歳。二つ井戸町に生まれる。捨て子。両親ともにいない。炭問屋「黒金家」（くろがねや）に拾われる。白銀屋の奉公娘のお妙と秘めたる恋仲。商家「黒金家」と商家「白銀家」は非常に仲が悪い。ある日、旦那の姪との縁談がでてくる。黒金屋の旦那は育ての父。逆らうことは許されない。そこでお妙と今生の別れとふぐをたらふく食べて、道頓堀に飛び込んで心中を図る。しかし失敗。ひとりだけ生き残ってしまう。天善とは友人。

②お妙 大和橋南詰にある商家「白銀屋」（しろかねや）の奉公娘。19歳。二つ井戸町に生まれる。捨て子。両親ともにいない。商家「白銀屋」の番頭が親代わり。黒金屋手代の六兵衛と恋仲。しかし、六兵衛に結婚話がでてきて、このままでは六兵衛と一緒になれない。ある日、道頓堀で『會根崎心中』のお初を見て、その恋の顛末に憧れた。そこで六兵衛と心中しようとする。道頓堀に飛び込むが、ふぐが当たって、痺れて、泳げなくなり、お妙だけが絶命する。

③天善 下寺町に生まれる。25歳。六兵衛、お妙の友人、幼馴染。じつは密かにお妙の事が好きだったりする。家は仏壇屋。縁あって浄土宗僧侶になる。闇商売で死体ブローカーをやっていて、宗右衛門町の遊女たちに死体の髪の毛や指（心中立をするときに使用する）を売っていた。女慣れしていて女遊びも激しい。

④和泉 南地・宗右衛門町「富田屋」の遊女。19歳。天善からお妙の髪の毛を買ったことで、一連の騒動に巻き込まれる。元は風呂女で、16歳で南地に売られた。情が深く、男に惚れっぽい。

⑤ジヘイ 大阪湾生まれ。トラフグ。

⑥オフク 瀬戸内生まれ。トラフグ。

⑦白銀屋の旦那さん お妙の奉公先・白銀屋の若旦那。遊びが過ぎて本家の黒金屋から分家筋の白銀屋に体よく追い出された。最近では南蛮語にはまっている。

⑧阿弥陀如来 阿弥陀如来。

【口上】(役者全員)

東西東西。一座高うは御座りまするが、不弁舌なる口上を持つて申しあげ奉ります。かくも賑々しく、ご見物の皆様、お集まり下され、篤く御礼申しあげ奉ります。さて、こたび演じますのは、艶笑喜劇全四幕「道頓堀心中冥途往来」でございます。

東風(こち)吹かば、梅のかわりに恋風の、木枯らし吹いた下寺町に、捨てられた子は二つ井戸。黒金と白銀との憂かれ世に、不和の商家は大和橋のたもとの北と南。どうして飛んだか道頓堀の、果てに別れた此岸と彼岸。再び出逢った相合橋で、南無阿弥陀仏と貴践群衆の回向の声に、目覚めた男と、死んだ女の、冥途を往来しての珍妙摩訶不可思議なる恋の顛末記。

わけて皆々様方に御願ひ申しあげ奉りまするは、役者並びに裏方一同に至るまで、未熟不鍛錬ものに御座りますれば、御目まだるき所は袖や袂で幾重にもお隠しあつて、よき所は拍手栄当の御喝采。七重の膝を八重に折り、隅から隅まで、ずずずいと、御願ひ申しあげ奉ります。先ずは道頓堀心中冥途往来。そのため口上。東西東西。

【第1幕】 龍法寺

舞台中央に仏壇。棺桶。中に死に装束のお妙が横たわる。読経をする天善。悄然としている六兵衛。天善の般若心経の声が響き渡る。

天善「(般若心経の読経) …南無阿弥陀仏」

六兵衛「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏…。お妙、すまん。ゆるしてくれ」

天善「なんで正月早々、道頓堀に飛び込んで心中なんかしようと思ったんや？」

六兵衛「わいとお妙は恋仲でな。2年と5カ月という長いつきあいやったんや。いつの日になるかわからんが、よくよくは二人で、所帯もって夫婦になろうという約束まで交わしてたんや。せやけどなあ。そないなこと、黒金屋の旦那には絶対いわれへん」

天善「そりやそうや。お前が奉公しとる黒金屋と、お妙が奉公しとった白銀屋は不倶戴天の敵やさかいにな」

六兵衛「いまの白銀屋の旦那さんは、もともとは黒金屋のご長男やったんや。これがしかし、もの見事に3代目のアホボンという奴でな。遊びが過ぎて、南地で太夫を囲うたりしたから、とんでもない借金をこさえてしもて。先代の、亡くなった親旦那が激怒しはって、ほんまは勘当も当然のところを、ごりよんさんとか大番頭さんとかが平謝りに謝って、それで結局、分家筋の白銀屋に入る。…という形でなんとか収まったんや」

天善「本家から分家筋に体よく追い出されたわけや。まあ、ようある話やな」

六兵衛「それでいまは月日も経ったから、白銀屋の旦那さんという形に収まったけど、黒金屋の旦那さんとはなにかにつけていがみ合う仲や。なんせいまの黒金屋の旦那さんは入婿で、昔は黒金屋の奉公人やったさかいにな。白銀屋の旦那さんからしたら、なんであんな丁稚上りが本家を継いだるんや？ 主家乗っ取りないか？と…」

天善「それでなにかにつけて因縁をふっかけてくる」

六兵衛「わいは黒金屋の手代や。白銀屋の奉公娘と夫婦になるなんていうたら、わいはええけど、お妙が、あのアホボンの白銀屋の旦那さんから、どないな仕打ちにあうか…またあのアホボンはお妙にもちよつかいだそうとしてはったんや」

天善「ややこしいのう」

六兵衛「女とみると見境ない人やからな」

天善「寺にでも入れてみたらどうや？」

六兵衛「あかんあかん。本人もいっぺん反省したことあるんや。『自分のこのどうしようもない色好みは前世からの因業や。この悪業を断ち切るために、高野山参りする』いうて高野街道をいきはったんや。ところが途中で河内長野の観心寺さんに立ち寄ってな。たまたま御開帳の日で、その秘仏の観音さんみて、あかんようになってしもた。なんや、えらいべっぴんさんの観音さんで有名ならしいのう」

天善「ああ。観心寺の如意輪観音さまやな。絶世の美女やった檀林皇后さまをモデルにしたという観音さまや。六本腕でな。二の腕のふくよかな感じとか艶めかしいんや」

六兵衛「そうそう。旦那さんは、『ああ。あの六本腕に抱かれない』とかいうてたわ」

天善「完全に病気やな」

六兵衛「仏像に頬ずりしたくて、そんな自分を止めるのに必死やったらしい。そんな風に欲情されてるとは観音さまも災難やで」

天善「これがほんまの知らぬが仏」

六兵衛「結局、旦那さんは、急いで大坂に帰ってきて南地に繰り出して。芸者3人呼んできて、で

つかい羽織ん中に入れて、六本腕にして、一晚中『如意輪観音ごっこ』や」

天善「白銀屋も長うないな」

六兵衛「問題は白銀屋の旦那だけやないんや。黒金屋の旦那も問題なんや」

天善「まさか黒金屋も如意輪観音ごっこ？」

六兵衛「ちやうちやう。じつは黒金屋の旦那さんから、わいの姪と結婚せえとこうきたんや」

天善「お前、黒金屋の旦那の姪いうたら、島之内でも有名な行かず後家やがな」

六兵衛「うちの旦那さんは、白銀屋のアホボンの旦那とは真逆で、ものすごいお堅い人だな。なんせ遊びという遊びをしたこともない。遊郭通い、悪所通いなんてもつてのほか。芝居も花見も相撲も博打も酒もやらん。堅物中の堅物や。顔まで四角いがな。四角だけやったらええけど、目がかくて鼻もかくて口もかくて、もはや人間いうより鬼瓦や」

天善「それだけの堅物やから、黒金屋の親旦那はんも娘婿に選んで跡を継がせたんやろうが」

六兵衛「それにしても堅すぎるわ。また、姪は旦那の弟はんの娘さんなんやが、お前見たことあるか？」

天善「あるある。旦那の弟さんも娘さんも見たことある。びつくりするぐらい旦那そっくりや。親戚一同おんなじような顔しとる。そうか。よかつたなあ。お前がその姪と結婚しても、さぞかし旦那さんそっくりの子供ができるやろう。よかつたよかつた」

六兵衛「鬼瓦に囲まれて生活しとらないわい」

天善「厄除けになつてええがな。商売繁盛するで。黒金屋の鬼瓦で、白銀屋の如意輪観音と戦うんや。どつちが勝つか見物やのう」

六兵衛「堪忍してくれ」

天善「それで結局、どないしたんや？」

六兵衛「とりあえず、毎月5日に生玉さんのお参りにかこつけて、お妙と会う約束をしてたから正月5日にも生玉さんであつたんや。それで、そんときに二人でどないしよか？と相談したんやが、ええ知恵がわくもんでもなし。一向に埒があかん。そのうち気晴らしに道頓堀でもいって浄瑠璃でも観よか？と入つたんが竹本座や。その浄瑠璃の演目が悪かつた」

天善「なんや？」

六兵衛「『曾根崎心中』や」

天善「またえらいもんみたな」

六兵衛「そやがな。曾根崎心中は徳兵衛に結婚話が持ち上がったって、そつから心中騒動が起こるやろ。わいも旦那さんからムリな結婚話を持ちかけられて、それで困つてる。徳兵衛とよう似た境遇や」

天善「徳兵衛の許婚も鬼瓦かいな？」

六兵衛「知らんわい。曾根崎心中の徳兵衛は、姪との結婚を断つて手付金を返しにいったけど、わいの方はもつと分が悪い。なにしろわいは捨て子や。道頓堀の川縁に捨てられてた。そこを黒金屋の旦那さんに拾われた。旦那はんはあんな怖い顔してるけど、わいの育ての親みたいなものや。育ての親で、かつ、ご主人さまや。そのいうことには絶対に逆らわれへん。このままいつたら、お妙とは別れなあかん」

天善「お妙はなんていったんや？」

六兵衛「浄瑠璃終わったあとに、もう気持ちもえろう沈んでな。お妙も長いあいだ無口やつたんやが、やつと口開いたと思つたら、いきなり…」

死体のお妙、いきなり起き上がる。以下、お妙は六兵衛と一緒に心の中のシーンを再現する。その回想シーンを再現を見ながら、時折、天善がつっこむ。

お妙「うち、フグ食べたい。フグをたらふく食べてみたい。六兵衛さんも食べたないか？」  
六兵衛「そうやな。フグか。ええかもしれへんな」

天善「ふーん。今生の別れに、一緒にフグ食べて、死にましようってことか？」

六兵衛「あえて言葉にはせんかったが、そういうことやな。それで道頓堀の馴染みの店に入って、フグだせ！いうてな」

天善「そんな金どこにあったんや？」

お妙「それはうちのへそくりです。いざというときのために、こつこつと少ないお給金を貯めてたんです。銀5匁ほどありました」

天善「それでたらふくフグを食べたと」

六兵衛「食べた食べた。もうこっちは死んでやる！と思つとるさかいにな。今生の別れや。最後の贅沢や思うと、またフグがうまいんや。せやけど、わい、肝があかんねん。なんや気落ち悪うて食べられへんねや」

天善「お前、フグの毒いうたら肝にあるんや！」

六兵衛「らしいなあ。そのことをわいもお妙も知らんかったんや。ところがわいと違って、お妙は魚の肝が好きなんや」

お妙「うち、魚の肝が好物なんよ。六さんの分も食べてええ？」

六兵衛「ええがな。ええがな。食べ食べ：いうて、わいの分のフグ肝を食べたんや。ところが食べ終わってもなんともない」

天善「ほう：それで？」

お妙「それで美味しいフグ食べて死ねたらよかつたんやけど、毒が当たらんかったらしやあないと。なって。一人で店を出て、ちよつと歩いて太左衛門橋から道頓堀を眺めました。寒い冬の夜やった。雪もちらついていた。せやけど、さっきのフグと酒がまだカラダに残つとつて。酔ってるからカラダが熱うて汗をかいてたぐらいです。雪やけど、ぜんぜん冷たいとも寒いとも思わん。それで、六さん、熱いわね」

六兵衛「ほんまやな。ほんまに熱いわ。わいなんか汗かいとるで」

お妙「わたしもよ。川ん中は、たぶん冷たくて気持ちええ思います」

天善「それが合図か」

六兵衛「そや。やつぱり心中いうたら川に飛び込まないかん」

天善「そうか？」

お妙「そりやそうです。やつぱ川に飛び込むんが、心中の花道、王道ですやん？首くくるとか、刀で切るとか、痛いし、怖いですがな」

天善「ようわからん」

お妙「それで、二人で手をとって、西の方を向いて、阿弥陀さんがいてはる西方浄土を目指して、南無阿弥陀仏！と合掌して飛び込みました。上から見てたら、お月さんやら宗右衛門町の提灯やらが揺らめいて、えろろ川面は綺麗やったんですが、いざ道頓堀川の中に入ると、もう真つ暗でなんにも見えまへん。また真冬でっしゃろ？川の水が冷とうて」

天善「そりや冷たいやろね」

お妙「冷たいどころか痛いぐらいですわ」

天善「そりや痛いやろね」

お妙「冷たいし、痛いし、暗いしで、もう自分がどこにおるかもわからん。一気に怖なつてきて、いつのまにか無我夢中で、ばたばた手足を動かしてました。六さんにいたっては」

六兵衛「助けてくれ〜！！！死ぬううう！！！！」

お妙「そしたら道頓堀川にいた牡蠣船のおやつさんや道中の人に救われたんです。気がついたら私も六さんも相合橋のたもとにおりました」

天善「情けないのう」

六兵衛「それで、みんなに川から救われたやけど、どうもお妙の様子がおかしい」

お妙「あれ？六さん、うち、なんか、おかしい。うち、うち、舌が、舌がしびれるうう〜！」

お妙、自分から布団に入って死体に戻る。心中の再現シーン終わり。

六兵衛「急に『舌が痺れる』といいだしてな。それであつさりとポツクリと死んでしもた。やつぱりフグの毒が当たったんや。フグの毒いうんは、あとから来るんやな。それでみんなから『心中か？』とやいのやいのと質問されてな。わい、怖いから『お妙はフグの毒で痺れて川に落ちた。それをわいが助けようとして道頓堀に飛び込んだ』と、そういう筋書きにしたら、わいは何の罪にもならんで怒られることもなくて済んだんや」

天善「惜しい。ちゃんと二人で心中できてたら、近松門左衛門に取材されて心中物の芝居になったのかも知れへんのかなあ。そんなオチでは芝居にならん」

六兵衛「その代り、道頓堀の馴染みのフグの店は、死者を出したいうて、東町奉行所に捕まって、つぶれてしもたんや」

天善「正月早々、かわいそうに。なんの罪もないのに、店つぶれるやなんて…そっちの方が悲劇やがな」

六兵衛「というわけで、お妙は死んだんや。お妙、許してくれ〜。なんで死んだんや〜」

天善「なんでつて…フグ食ったからやないか。まあ、死んだもんはどうしようもないわい。南無阿彌陀仏南無阿彌陀仏…」

六兵衛「天善、銀5匁貸してくれ〜！」

天善「なんでや？」

六兵衛「いまから道頓堀いってフグ食べる。苦手やけど、今度はちゃんとフグ肝食べる。それで死ぬんや〜！」

天善「アホか。そんな理由聞いて銀貸せるか。それより、せつかく生き残ったんや。命が助かったんや。達者に、前向きに生きればええがな」

六兵衛「どないしたら前向きに生きれるんや？」

天善「女なんて星の数ほどおる。廓いこ。南地や。宗右衛門町や。富田屋いこ。そやそや。このあいだも、わいのとこに小輝から起請文が届いてな。催促されてるんや(着物のたもとから起請文を取り出す)。『愛し愛しの天善さまへ 一つ起請文の事なり わたくしごと来年3月年期が明けそうらへば、貴方さまと夫婦になること 実証なり 宗右衛門町富田屋小輝』どや？」

六兵衛「相変わらずの生臭坊主やのう。起請文なんか、そんなもん何枚でも書けるがな。3枚でも5枚でも、同じような起請文をもらってるやつがほんぼでもおるわい」

天善「そこをわかって遊ぶのが廓つてもんやがな。お妙はわしがちゃんと懇ろに吊って成仏させるから」

六兵衛「お妙〜！なんで死んだんや〜！」

天善「うるさい。あのな。世の中にはな。フグの毒に当たっても死なへんやつもおるし、ちよつと風邪で寝込んでたと思つたらコロツと死ぬやつもおるし、女遊びしすぎて気持ち良すぎて腹上死するやつもおる。人間さまいうんはな。病気や事故で死ぬんやないで。寿命で死ぬんや。これはすべ

て阿弥陀さんが決めてはるんや。諦めて遊びにいけ。な」

六兵衛「わい、そんな金ない」

天善「貸しといたるがな」

六兵衛「おごりやないんかい？」

天善「そもそも『お妙には身寄りが無い。しかし、わいも葬式にだす金がない』いうて、わいのところに持ってきて、仏さんをおしつけたんは誰や？ほんまやったら白銀屋の奉公娘なんやから白銀屋が葬式代だしたらええんちゃうんかいな？」

六兵衛「いや、それは困る。黒金屋の旦那さんは、むしろ奉公人に白銀屋の人間とは一切かわるな、いうて厳命してたんや。ものすごい堅物なお人やからな。手代のわいがよりにもよって、その白銀屋の奉公娘と隠れてつきあって、しかも心中沙汰を起こした…なんてことがわかったら、ヘタしたらわいは黒金屋をクビになる」

天善「ややこしいのう。奉公人の苦労やな。酒でも飲まなやつてられん」

六兵衛「ほんまにな…。わかった。宗右衛門町いくわ。弔い酒や！」

天善「お。そうか。行け行け。わいも後で駆けつけるさかい」

六兵衛「如意輪観音ごっこできる？」

天善「したいんかい！」

六兵衛「いや。冗談や。わいは弔い酒をするんや！（お妙の死体に向かつて）南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。お妙。許してくれ。今度あつたらフグ肝のやつ、ただじゃすませへんからな。よっしゃ。ほないこ。いざ、宗右衛門町へ！敵討ちやあ！」

六兵衛、去る。

天善「やっといきよったわい…。お妙も可哀想にな。まあ、しかし、なにかも寿命や。おっと。そろそろ、お客人が来る頃やな。お妙、すまん。お前は身寄りが無い。さらに六のやつも貧乏人で、お前の葬式代も出せんいうんやからな。こうなったら、お前のカラダで払ってもらうしかないんや。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏（といいながら、髪の毛を切り、それを纏めて箱に収める）。よし。これでよし」

南地・宗右衛門町・富田屋の遊女・和泉、来る。ほっかむり。顔を隠している。寺にやってきて、扉を叩く。

和泉「もし」

天善「はい」

和泉「天善さまはおられますか？」

天善「お静かに。こちらへ」

和泉「（寺に入る）天善さまですか。こちらで女の髪の毛：鬘（かつら）を売っていただけるとお聞きしましたが」

天善「シーっ！お静かに。もうちよつとこちらへ…確かに売ってまっせ」

和泉「なんでお静かに？」

天善「いやあ、死体から髪を切って、廓に売ってるなんてことがわかったら、ちよつと困る」  
和泉「どこの寺でもやつとることやないですか？」

天善「それはそうやが、一応、寺にも体裁というものがある」

和泉「はあ、そういうもんですか。下寺町の龍法寺にいけば、若い女から幼女、年寄まで、10代から80代までの髪がみな揃う。品揃え豊富の龍法寺って、宗右衛門町の遊女なら誰もかれもが知ってますよ」

天善「困ったな」

和泉「それだけ商売繁盛ってことで。ええことですがな」

天善「いやあ、それは近松門左衛門さままでな。曾根崎心中が大当たりしてから、世の中、心中立が大流行りやからなあ。昨今は心中立の立て倒れで、熊野権現の起請文の値打ちも大暴落や。起請の1枚、2枚じゃまったく効かん」

和泉「こんなの何枚でも書けますからね。私も書きまくって、腱鞘炎ですわ」

天善「さいきんはお客さんを食いつなぐために、爪を抜いて渡す『放爪』(ほうそう) というのもあるそうな」

和泉「そうですね。爪をひっこ抜いて心中立をする。なんや酔に浸して爪を柔らかくして抜けば痛ないと聞いたんやけど、あれ、ほんまですか？」

天善「いや。それは物知らずの迷信や。酔に浸しても麻酔効果なんぞはないから、もちろん抜くと痛い。そうやなくて、爪を薄皮一枚残して爪を削ぐという方法があるんや。そういう専門業者もいる。拙僧に言えば、紹介しまっせ」

和泉「考えときま」

天善「あと心中立には切指ちゅうのもあるな」

和泉「おお、こわ」

天善「これも昔は指の根本から切るブツ切りやったんやが、最近は指の先をちよつとだけ切るソゲ切りや」

和泉「ソゲ切りでも痛いんちゃいますのん？」

天善「痛い。なので、これも若い女の死体の指を切つて、それを売るちゅう専門業者がおる。廓で恋愛ごっこ、心中ごっこを繰り返して、惚れた男と女が、結局、別れんといかんようになる」

和泉「大抵は女に他に金払いのええ客ができたとか、男にもほかにええ若い遊び女を見つけたとか、そういうわけでしょう」

天善「それはそうやが、そういう無粋なことは決していわん。お互い、愛想をして、愛想をして、愛想をして、愛想をして、愛想尽くした結果、美しく別れる。女は別れ話しながら泣きながらいうわけや」

和泉「(和泉が女の役に成りきる)『これから先、他の男に抱かれても、ほんまに惚れたんはあんただけ。来世の来世の、そのまた来世では夫婦になりましょう。およよ』」

天善「そう、その通り。それで、その誓いに切指をして渡す。男の方も、いとしかわゆしの女の切指を見て号泣するんやな」

和泉「(男の役に成りきる)『おお、おれのことを思ってこんな切指まで…。おうよ。来世の来世の、そのまた来世で夫婦になろうぞ。およよ』」

天善「これがほんまは若い女の死体の指や。騙された男はアホやが、まあ、男もじつは大抵、わかっていたりするものでな…。あ。うちとこの寺でも、どないしてもというご要望があれば、若い女の死体の指も扱わないでもないでっせ」

和泉「いりまへん」

天善「そうですね。まあ、お仲間さんに宣伝しといてください」

和泉「商売上手な。そこまで愛想尽くする男もなかなかいませんわ。せいぜい鬘でお願いします」

天善「そうですね。これまた心中立のひとつ。女の命より大事な髪の毛を切つて渡す『断髪』」

和泉「その通りです」

天善「お客さんは運がええでっせ。ちょうど今朝、若い女の鬢が手に入ったところだね。こんな雑魚場の魚市にいつても手に入らへん。イキがええでっせ。ピチピチですわ」

和泉「ほな、それでお願ひします。おいくら？」

天善「こんなもんで」（左の掌でかくしながら、右の指で数字を見せる）

和泉「あら。お安い」

天善「ねえさん、はじめてのお客で、綺麗やからね」

和泉「顔、わかりませんやん」（ほっかむりで顔を隠してポーズ）

天善「いや。目が見える。ちよつと勝気な目がええね。気に入った。おまけしときまっせ。置屋、どこでつか？」

和泉「教えへん。あんさんには心中立が効かんさかい（金をわたしながら）」

天善「ああ。ふられてしもた。（金を受け取る）おおきに。まいどあり。また来ておくれやす」

和泉「ええ。はばかりさま」

和泉、去る。

天善「ええ遊び女（あそびめ）やったなあ。声がよろしい。どこの置屋やろ？まあ、ええわ。さて、ほな、わいも富田屋に繰り出すとするか。六の吊い酒につきあわんといかん。『一人が噂世話狂言の仕組の種となるならば、我を紺屋の片岡に、何とか思ひ染川は台詞に泣いてくれよかし』ってか」

天善、去る。

■幕間劇① ジヘイとオフク「大阪湾」

ジヘイとオフク登場。両手（エラのように）を後ろに伸ばして、ゆらゆらと動かしている。泳いでいるさまを表現している。

オフク「トラフグのオフクです。瀬戸内海の讃岐の方で生まれました。早くにおとんとおかんを亡くし、天涯孤独のトラフグでした。2年前に下関に旅行にいったときに、人間の網にひっかかって、あやうく掬われそうになったんですが、ジヘイさんが助けてくれました。あれ以来、命の恩人のジヘイにメロメロのぞっこんです」

ジヘイ「トラフグのジヘイいます。大阪湾生まれです。2年前に下関まで物見遊山にいったときに、人間の網に掬われそうになっていたオフクを助けました。それ以来、つきあっています。今日は大阪湾で2人で遊んでいます。ああ。やっぱり大阪湾は気持ちがあえなあ。海流が穏やかで、気持ちがあええ」

オフク「ほんまですな。ジヘイさん。明石の海は海峡が狭いさかい、流れがはようて、大変ですもんね」

ジヘイ「そや。せやから明石の鯛は、海流に鍛えられて、身が引き締まって美味いんやけどな。でも気をつけあかんで。このへんはプカプカしてたら、人間がようさん網はつてるさかいにな。掬われてしまうで」

オフク「なんで人間で、私らみたいなもんを食べたいと思うんでっしゃるな？」

ジヘイ「ん？」

オフク「私らは毒もつてる魚でっせ」

ジヘイ「ああ。そういうことか。そうやな。テトロドトキシンや。神経毒や。300度以上に加熱しても分解されへん。経口摂取による致死量はわずか2ミリグラムで、あの青酸カリの約850倍という恐ろしい毒性を持つとる」

オフク「なにも、こんな恐ろしい毒もつてる魚を食べることないやおまへんか？」

ジヘイ「なんせ人間からは、テッポウなんていわれとるからな。鉄砲。つまり、当たったら死ぬ。即死するという意味らしい」

オフク「恐ろしい」

ジヘイ「またいつちやん、わしらを食べるのが、このへんに住んどる大阪人なんや」

オフク「え？ そうなんですか？」

ジヘイ「下関がいつちやん、ふぐの水揚げは多いけどな。ふぐの消費量ナンバーワンは大阪や。全国のおふぐの6割は大阪人が食べとる」

オフク「大阪人が憎い！」

ジヘイ「そうや。食べて、下手したら死ぬのがわかってるのに、食べよる。毎年、死亡者がとる。

大阪人はアホや」

オフク「日本人の中でも、いつちやん、アホや人種やおもいますわ」

ジヘイ「それに比べて、かしこいんは、北陸の方やな」

オフク「なんですか？」

ジヘイ「北陸には、フグの卵巣の糠漬けいうんがあるんや」

オフク「え！？（下腹〓卵巣をおさえる）」

ジヘイ「フグの卵巣は、恐ろしいで。肝以上に毒があるんや。ところが、北陸人は、それを塩漬けにするんやな。しかも6年間も」

オフク「6年間!?!」

ジヘイ「そうや。そうすると、なんでかしらんけど、フグ毒が無毒化されるんや」

オフク「4年目やとあかんのですか?」

ジヘイ「あかん。死んでまう」

オフク「5年目でも?」

ジヘイ「死んでまう」

オフク「誰がそんなん発見したんでつか?」

ジヘイ「わからん。北陸の人やな。おったんちゃうか? 2年間、塩着けにしたフグ食べて死んだ人とか、3年目に『今度こそいけるやろう!』と挑戦して死んだ人が。そうやないと6年間、塩着けにしたら無毒化するということが証明できへん」

オフク「北陸の人、そこまでして食べたいんですか? 私らの卵巣を」

ジヘイ「執念やな」

オフク「怖い!」

ジヘイ「人間こそは、鬼。不倶戴天の敵や。まあ、つかまらんように気をつけないかんで」

オフク「ほんまですな。もし、うちが、人間に捕まったら?」

ジヘイ「そんなときは、おれも一緒につかまるがな」

オフク「ああ。ジヘイさん」

ジヘイ「オフク! 死ぬときは一緒やで。心中や」(抱擁)

オフク「ところで今日はどいきまひよ?」

ジヘイ「そうやな。新しくできたナルトウズシオランドにいこう」

オフク「なんでんのん? そのナルトウズシオランドで」

ジヘイ「鳴門海峡の渦潮のテーマパークや。凄いらしいで。ぐるぐるぐるぐる、みんなで廻って  
るらしく」

オフク「わあ! 楽しそう。いきまひよいきまひよ」

ぐるつと回って。

ジヘイ「ついた! ナルトウズシオランドや」

オフク「すごい! ウズシオでみんなが回ってる!」

ジヘイ「見てみ! タイやらヒラメやらが、ぐるぐる回ってる! これがほんまの鯛やヒラメの舞踊  
りや!」

オフク「わたしらいきましょ!」

ジヘイ「いこいこ」

オフク「ああ! ウズシオがきた! わー! あーれー(くるくるくるくる)(舞台上から下へ)

ジヘイ「オフク(くるくるくるくる)(舞台上から下へ)

オフク「ジヘイさん(くるくるくるくる)(舞台上から上へ)

ジヘイ「オフク(くるくるくるくる)(舞台上から上へ)

オフク「ジヘイさん(くるくるくるくる)(舞台上から下へ)

ジヘイ「オフク(くるくるくるくる)(舞台上から下へ)

オフク「ああ。あかん。目が回ります」(二人、ふらふらになって出てくる)

ジヘイ「ほんまやな」  
オフク「ジヘイさん、つかれました」  
ジヘイ「ほんまやな」  
オフク「楽しいけど、ナルトウズシオランド、吐き気がします」  
ジヘイ「確かに。大丈夫か？」  
オフク「ちよつと休めば大丈夫」  
ジヘイ「そうか・・・ほな、どっか、ご休憩でも入ろうか？ふたりつきりになれるところに・・・」  
オフク「え？・・・ええ（恥ずかしそうに。首肯）」

二人、肩を組んで歩き出したところで、しかし、なぜか先に進めない。

オフク「あ。あれ！？ジヘイさん！？」  
ジヘイ「ん？なんや！？」  
オフク「なんか、こつから先に進めません」  
ジヘイ「ん！！？・・・ああ！しまった！これ、網の中や！」  
オフク「え？網の中！？」  
ジヘイ「ウズシオランドで目が回ってるうちに、網の中に入ってしまったんや！」  
オフク「ああ！網がひっぱられる！」  
ジヘイ「ああ！人間につかまってしまう！」  
オフク「ジヘイさん！」  
ジヘイ「オフク！！！！」

(暗転)

【第2幕】 南地・宗右衛門町・富田屋

三味線の音。騒ぐ男女の嬌声。部屋の中央は宴席。六兵衛がなにやらそわそわしている。

天善「いやあ、外は寒いのが。雪が舞つとるわい。六、またせたな。ちゃんと弔い酒やつとるか？」

六兵衛「おお！天善、ようきた。すまん。金貸してくれへんか？」

天善「なんやいきなり？もうそない飲んだんか？」

六兵衛「いやちゃうんや。ほしいもんがあるんや」

天善「なんや？なにをかうんや？」

六兵衛「反魂香や」

天善「はんごんこう？」

六兵衛「そや。お前、知つとるか？反魂香」

天善「知らんなあ。お香か？」

六兵衛「ただの香やないで。これは死者の霊を蘇らせるといふ幻の霊香や」

天善「はあ？？」

六兵衛「お前も知つてるやろ？あの幫間の一人（いっばち）」

天善「一八て、ああ、あの太鼓持ちかいな」

六兵衛「そや。お前にいわれて弔い酒やいうて、富田屋までやつてきたが、ひとりでしたら、やっぱり、なんや気が滅入つてきてな。だれでもええから、おなごしでも呼ぼうと思て、廊下出たら、ひよっこり一人と出逢つたんや。『おやおや、お珍しい。ここで会つたが百年目でございますね』なんて調子のええこというてたが：なんや、あの高麗橋砥石屋の治兵衛さんの付き人で、今日は富田屋にきとるらしい」

天善「ああ。あの船場の大店の治兵衛さんか。あの人は遊び上手やからな」

六兵衛「それで、一人がいうには、今宵1月7日は、あの夕霧はんが若くして病気に倒れて亡くなつた日やそうで。命日なんやな。三十三回忌らしい。弔い上げや。それで、夕霧はんを偲ぶ会があるらしくてな」

天善「夕霧はんで、あの新町廓の伝説の太夫の夕霧か？扇屋の？」

六兵衛「そやそや。夕霧はんと馴染みやつた但馬屋の世之助さんや藤屋の伊左衛門さんや俳人の上島鬼貫らが集まつてな。夕霧の遺愛の三味線やら位牌やらを持ってきて、それで夕霧太夫の霊を呼び出すらしい」

天善「どないして？」

六兵衛「そこや。そこで反魂香を使うんや。この反魂香ちゆうんは、唐の詩人の白居易の『李夫人詩』にも載つてて有名な香らしいんやな。前漢の武帝が、李夫人を亡くしたときに、道士に霊薬を整えさせて玉の釜で煎じて練つて金の炉で焚き上げたところ、煙の中から李夫人の姿が見えたちゆうんや。霊薬中の霊薬や。なんでも平安時代の陰陽師の安倍晴明なんかも用いていたらしい。それで夕霧太夫を呼び出すというんやな」

天善「アホらし。幫間の一人のもつてくるもんなんか、ばつたもんに決まつとるがな」

六兵衛「いやいや。一人の眼は本気やつた。真剣そのものや。あれはホンマモノに違いない。それでそれをわけてくれいうたんや」

天善「なんぼほどするんや？」

六兵衛「こんなもんや」（掌で隠して人差指Ⅱ1両の意味をみせる）

天善「高っ！ばつたくりやがな…絶対だまされとるわ。んで、そんなもん買うて、どないすんねん？」

六兵衛「それでお妙の霊を生き返らせるんや」

天善「まだそんなこというとるんか…。あのな。そんな反魂香なんてもんはこの世にあらへん。そんなもんあったら、むしろ僧侶の商売があがったりやがな。どうせ一八が下手な小細工しとるんや」  
六兵衛「どうやって?」

天善「そんなもん簡単や。酒でみんなを酔っぱらわせてやな。眠たくなる香を炊くんや。んでカラクリ人形をこさえて、隣の部屋から屏風越しに見せるんや。それで、おなごしに夕霧太夫の声色を真似させて、それで夕霧の霊が甦ったとか、そんなつまらん仕掛けや。幽霊の正体見たり枯れ尾花や」

六兵衛「うーん。そうやろか」

天善「それにそもそもそんな香を買う大金もあらへんがな。諦めて吊い酒せえ。ほれ、飲め飲め」  
(酒を注いで杯を渡す)

六兵衛「うーん」(とりあえず飲む)

天善「死んだ人間のことは早く忘れるがええ。お前が未練残してたら成仏できるもんも成仏できんがな。夕霧太夫も迷惑な話やで。三十三回忌?死んでからもう30何年も経つのに、いまだにわけわからん線香で叩き起こされて。男衆はええけど、女衆は人前に入るのに化粧やらなんやらで大変なんやで。太夫なんてことになったら、恰好の準備だけでも大童や。お付きのカムロも2人はつくなあかん。カムロの幽霊まで呼び出さないかん。そんなもん、やつとられんわい。そんなことよりも遊べ遊べ。わいも今日は小輝に逢いたい」

六兵衛「結局、お前は小輝と遊びたいだけやがな」

天善「妬くな妬くな。ちゃんとお前にもお相手をみつけてあるんや。小輝にいうたんや。『今日はわいの連れの六兵衛がちよつと気落ちしとる。そこで小輝の見立てでええから、六兵衛と相性の良さそうな、ええ遊び女を宛がって慰めてやってほしいんや』とな。『わかりました。ほかの男の頼みならそんなもんうけませんけど。いとしの天善さまの頼みは断れません。ほな、和泉がよろしいです』とかいうてたわ。いま評判の富田屋の売れっ子らしいな。ええ名前やな。和泉。泉州女は気が強いというが、そういう女ほど情が深いもんや。まあ、うまいことやれ」

六兵衛「わい、まったく、そんな気にならんのが…」  
天善「ええがな。相手に任しとつたらええんや。ほな、わいは小輝のどこにいくさかいにな。払いは気にするな。今日はおれが勘定しとく。いや、貸しやけどな。まあ、大いに遊んだらええ。わしももう勝手するからな。おおきに。はばかりさん」

天善、去る。六兵衛、ひとりになる。仕方なしに酒でも飲む。三味線の音。どんちゃん騒ぎの嬌声もどこからか聞こえてくる。しばらくして、和泉が来る。

和泉「失礼いたします。六兵衛さまですか?」

六兵衛「はい」

和泉「和泉でございます。今夜のお相手を仕ります」

六兵衛「…はい」

和泉、六兵衛の隣に座る。なにもない。沈黙。気まずい。

和泉「小輝さんからお聞きしましたが、なにやら気落ちしているそうで。小輝さんの御客人がどこのどなたかは知りませんが、その御客人から慰めてやってほしいというご要望をお聞きしました」

六兵衛「…はい」

和泉「お酒でも飲みますか？」

六兵衛「…いや、もう、結構」

和泉「そうですか」

六兵衛「あのう…反魂香って知ってはりますか？」

和泉「は？」

六兵衛「死者の霊を蘇らせるというお香ですわ」

和泉「はあ？」

六兵衛「安倍晴明公が使ってたとか」

和泉「はあ？…わたしにはわかりません」

六兵衛「そうですか。そうですわな…」

無言が続く中、和泉、立ち上がり、おもむろに帯を解いて、打掛を脱ぎだす。

六兵衛「…あ」

和泉「…え？」

六兵衛「今日は、今晚は、ええです」

和泉「…え？」

六兵衛「すんまへん…」

和泉「わたしでは不足ですか？」

六兵衛「いや、そうやおまへん…すいまへん」

和泉「小輝はんの大事なお客様からのご要望で、和泉に慰めてほしいといわれました。ここで、ちやんとお相手をしないと、富田屋、いや、和泉の名折れになります」

六兵衛「いや、ありがとうございます。しかし、今晚はそんな気になれんです」

和泉「…ほな、今晚はあかんでも、いつの晩ならええですか？」

六兵衛「え？」

和泉「わたしも用立てされた以上、このままなにもせず帰らすわけにはいきまへん。小輝はんに怒られてしまいますわ。せやけどお客様も、今晚はなんもせんでもええといたします。ほなら、また違う日取りに、和泉を用立てておくんなまし」

六兵衛「そんな…」

和泉「互いの心の中の想いを推し量ったら、それがいちばんでっしやろ」

和泉、棚より箱を取り出す。

六兵衛「これは？」

和泉「わたしの髪です。髪は女の命よりも大事なものの。心ある方にお会いしたらお渡ししようとして、覚悟して髪を切つて納めていたものです。このままなにもせんでお客人を返したら、和泉の名折れになりますよつてに。これを持ってください。いつでも和泉を用立てていただいでかまいまへん。そのときは花代もいりまへん。また再会したさいに、この髪を返してください」

和泉、六兵衛に箱を渡す。

六兵衛「そうでっか。女衆に髪なんかもらうんははじめてや。なんや、かたじけないですな…」（箱を受け取る）

六兵衛、ふと受け取った箱から髪を取り出す。そして匂いをかいて、いぶかしがる。

六兵衛「この髪は…」

和泉「…え？」

髪を持って固まった六兵衛、茫然と和泉を見る。暗転。

（暗転）

■幕間劇② ジヘイとオフク「ズボラ屋のイケス」

ジヘイ「トラフグのジヘイです。オフクと一緒にナルトウズシオランドで遊んでいたら、目が回ってしまって、憎き人間どもの罠にひっかかって、網で掬われてしまいました。たどり着いた先は、大坂・道頓堀のズボラ屋というフグ料理専門店のイケスの中。もう一か月ほど、ここで、オフクと過ごしています」

オフク「ああ。ジヘイさん、みて！」

ジヘイ「なんや、オフク？」

オフク「さつきまでこのイケスの中で一緒に泳いでいた、明石の鯛のギンギロはんが・・・」

ジヘイ「ああ・・・。さつき、客の注文で、捕まえられたからな・・・」

オフク「なんと変わり果てた姿に・・・」

ジヘイ「あれは活造りいうやつや。人間というのは、ほんまにムゴイ。タイなんかは人間どもに『魚の王様や』とか持ち上げられるわりに、ありえないぐらい残酷な目にあわせる。活造りなんて、鬼の所業や」

オフク「あれは、一体、どないなってますのん？」

ジヘイ「あれか。あれは、ほんまにえげつない料理やで。活造りいうてな。まず、包丁で、ずぶつと刺された瞬間に、タイはあまりの痛さに失神してまうんや。んで、そうやって意識を失ってるあいまに、急いで、そぎ切りいうて、包丁で身と骨をはがすんや。人間どもはそれを『三枚に卸す』いうんやな」

オフク「『三枚に卸す！？』・・・なんて恐ろしい！」

ジヘイ「そや。神も仏もない。鬼畜の仕業や。そうやって、はがした身を、また元に戻すんや。これがムゴイ」

オフク「ああ・・・」

ジヘイ「失神してたタイが目を覚ますと、なんや、包丁をいれられたはずの自分のカラダが、なんともないねん。ちゃんと身があるように見える。でもほんまはちゃうねん。すでに身ははがされて、それがまた元に戻しておかれてるだけやねん。骨だけやからな。なんや、どっかから、すきま風が吹いてくるわけや。それで『なんや知らんけど寒いなあ』思いながら意識がすっかりしてくると、自分が三枚に卸された状態がわかる。もうこうなったら大パニックや。あまりの恐怖で、ピクピクピクピク！っと痙攣するしかない」

オフク「お、恐ろしい・・・」

ジヘイ「また、人間の若い女がえげつないんや。そういうのをみて、最初は『怖い』と『ピクピク動いてる』とかいうてな。でも食べ始めたら無我夢中や。最後はタイのあら汁にして、目ん玉までしゃぶりおる」

オフク「ああ。ギンギロはん・・・可哀想に・・・」

ジヘイ「もうしゃあない。死んだもんのことは考えてもしゃあない。供養してあげよう。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏」

オフク「わたしらもいつかあんな目にあうんやろか？」

ジヘイ「『てっさ』いうてな。鉄砲の刺身で、ふぐの刺身の料理があるさかいにな。薄造りいうて、向こうが透けて見えるぐらい、薄うに身が削がれるんや」

オフク「向こうが透けて見える！？」

ジヘイ「そや。何度も何度も包丁いれられてな。ぶつ切りちやうで？薄切りや。もう、はようひと

思いに殺せ！といたいぐらいや。人間どもは、そうやって、わたらのカラダをいたぶって遊んでるんや」

オフク「むごい・・・」

ジヘイ「『てつちり』いうんは、ちり鍋や。これは煮て食べられる。当たり前やけど熱いで。ぐつぐつとやられてな。さらに人間どもは、鍋の残りもんまで食べようとしよる。塩とか卵で味を調整して、ご飯を入れてな。それでまた煮立たせるんや。それで『ぶぐ雑炊』にして食べられる」

オフク「雑に炊くと書いて雑炊!？」

ジヘイ「ヒレを切られて、あぶられて、ヒレ酒いうて飲まれたりな」

オフク「ああ・・・」(ふらふらとする)

ジヘイ「大丈夫か、オフク！しつかりせなあかんで。大丈夫や！イケスん中やけど、なんとか、がんばって生き延びるんや」

オフク「こんな絶望的な状況で、どうやって生き延びるんですか？」

ジヘイ「あきらめたらあかん。あきらめたら、フグは終わりや」

オフク「どないしまんの？」

ジヘイ「例えば、客がきたときは、こうやって横向きに、お腹みせて泳ぐんや」

オフク「なんでですか？」

ジヘイ「これは、要するに、『もう死にかけやで〜』っていうのを演出するんやな。こうすると、客は、『あ。このフグはあかん。もっとイキのあるやつを選ぼう』ってなるがな」

オフク「なるほど！」

ジヘイ「横に泳ぐんは、コツがいるで、コツが。こうや。」

オフク「はい」

ジヘイ「こうやって、横に泳いでな。『もうあかんで〜』『わいはもう死にかけやで〜』『食べたら死ぬで〜』『死ぬで〜』『おなか下すで〜』」

オフク「なるほど。『もうあかんで〜』『死にかけやで〜』『食べたら死ぬで〜』」

ジヘイ「そうそう！その調子！せやけどな。それは客のときだけや。店のもんの前では、あかん」

オフク「そうなんですか？」

ジヘイ「そや。店のもんからしたら『あ。こいつ、腹が横向いとる。もう長ないな。はよ料理に使ってまお』ってなるがな」

オフク「なるほど！」

ジヘイ「だから店のもんが見てるな？ってときは、もう、これみよがしにピチピチ！ピチピチピチ！〜！って勢いよく、はねたるんや」

オフク「ピチピチ！ピチピチピチピチ！！」

ジヘイ「そや。ピチピチ！ピチピチピチピチ！」

オフク「ピチピチピチピチ！！」

ジヘイ「ピチピチピチピチ！！！！」

オフク「ああ。なんか生き延びることができそうな気がしてきました」

ジヘイ「そや。そうやって生き抜くんや。夢をもたなあかんで。どんな絶望のときでも、あきらめたらあかん。夢を持つとう」

オフク「そうね。わたしも夢を持ちます。もう一度、あの気持ちのいい大阪湾に戻れるように」

ジヘイ「そんな大それた夢を持つもんやない」

オフク「え？夢をもてといましたやん？ほな、ジヘイさんの夢はなんですか？」

ジヘイ「わいか？わいはな。このイケスの中で、人間に捕まらずに、老衰で死ぬことや」

オフク「ちっちゃ」

ジヘイ「現実的やというてくれ」

オフク「あ！客がきましたわ」

ジヘイ「ん？あれか？ああ。あれは大丈夫や」

オフク「え？」

ジヘイ「あれは大坂屋の太左衛門さんや。このへんの道頓堀の芝居小屋の劇場主や。あの人の隣に女がおるやろ？」

オフク「はい」

ジヘイ「あれは嫁はんや。嫁はんときたときは、あの人は大丈夫。そんなイケスのええ魚なんか食わせへん。吊った魚にエサはやらんいうやつや」

オフク「え？」

ジヘイ「太左衛門さんは、宗右衛門町の遊女の和泉つてのに、いま惚れててな。そいつときたときが危ない。タイとかフグとか、ええ魚ばかり、ごちそうしよるからな」

オフク「ジヘイさん、客のことまで把握してるんですか？」

ジヘイ「当たり前やがな。生き抜くためには、客のこともちやんと覚えとかなな」

オフク「ジヘイさん、たくましい」

ジヘイ「あ。新しい客がきた」

オフク「若い男女ですね。あれは誰ですか？」

ジヘイ「わからん。初顔やな。あんま金もつてそうに見えへんけど・・・ああいう新しい客がいつちやん危ないんや。なにを注文するんか、わかれへんからな」

オフク「あ！女の方がわたしを指差しました！」

ジヘイ「なんやて！？いかん！オフク、狙われとる！！」

オフク「ああ！！！網が、網がやってくる！！！」

ジヘイ「逃げろ！オフク！！！」

オフクに体当たりするジヘイ。

ジヘイ「ああ！」

オフク「ジヘイさん！！！私は助かったけど、ジヘイさんが網の中に！」

ジヘイ「しまった！オフク、大丈夫か！？」

オフク「私は大丈夫！！でもジヘイさん！」

ジヘイ「もうおれはあかん！達者で暮らせよ、オフク！」

オフク「ああ！なんということ！ジヘイさんこのまま別れるなんて！」

ジヘイ「泣くな！オフク！諦めたらあかんで！」

オフク「ジヘイさん！じつは、おなかにあなたの子が！」

ジヘイ「・・・ええ！？」

オフク「あなたの子がいるのよ！」

ジヘイ「なんやて！？ほんまか！？オフク！・・・って、わしら魚類ちやうんか！？」

オフク「え？」

ジヘイ「おなかの中にこどもがいるんは、哺乳類ちやうんか！？」

オフク「わたしらは、ちよつと進化したトラフグなのよ！ニュータイプなの！」

ジヘイ「そ、そうなんか？ようわからんけど、そういうことにしとこ」

オフク「はい！」  
ジヘイ「ああ！でも、よかった！では、元気にややくを産んで生き延びてくれ！」  
オフク「ああ！ジヘイさん〜！！」  
ジヘイ「オフク〜！！」（ジヘイ、網にすくわれて、はけていく）

（暗転）

■劇中劇 「白銀屋のだんさん」

夕刻の道すがら。龍法寺への道を急ぐ六兵衛。そこに、白銀屋の旦那さん。

白銀屋 「OH！ソコにいるのは、もしかして、六兵衛ではないデスカ？！ダッハ」

六兵衛 「・・・え？白銀屋のだんさん」

白銀屋 「S o デス！！ワタシは白銀屋のだんさんです Dank！」

六兵衛 「・・・なんちゅう喋り方をしてはるんですか？」

白銀屋 「コレは、南蛮語の、オランダ語を、ベンキョーしてるのダスゲマイネ！」

六兵衛 「な、南蛮語ですか？（ひとりごとのように）またヘンなもん懲りはったなあ・・・」

白銀屋 「パードン？いまヒトリゴトで、軽く白銀屋のことをデイスったデストロイヤー！？」

六兵衛 「してまへんしてまへん。旦那さんの飽くなき向学心の高さに関心しておったところです」

白銀屋 「OH！嬉しいデスネ！そもそも南蛮語から日本語になった言葉はケツコー多いのヨードチンキ！」

六兵衛 「そ、そうなんですか？」

白銀屋 「例えば、ポン酢は元はオランダ語の『p o n s』（ポンス）で、これは柑橘系の果汁のことダッハ！」

六兵衛 「へ〜。そうなんですか？」

白銀屋 「寿司のバッテラは『b a t e r i a』（バッテイラ）から来ていて、これは小船のことダッハ！」

六兵衛 「へ〜」

白銀屋 「あと『お転婆娘』の『お転婆』は、じつは、元はオランダ語の『o n t e m b a a r（おんてむば〜）』で。これは『手におえない』という意味から来ていリウマチ！」

六兵衛 「手に負えないが、お転婆ですか？」

白銀屋 「ノンノン！『o n t e m b a a r（おんてむば〜）』。リピートアフターミー？」

六兵衛 「え？」

白銀屋 『o n t e m b a a r（おんてむば〜）』、さん、はい！」

六兵衛 「お、おてむば〜」

白銀屋 「ノンノンノン！『o n t e m b a a r（おんてむば〜）』」

六兵衛 「お、おんてむばあ？」

白銀屋 「ノンノンノンノン！『o n t e m b a a r（おんてむば〜）』」

六兵衛 「おんてむば〜」

白銀屋 「ノンノンノンノン！オンテムムム・バアアア！」

六兵衛 「いや、さつきとぜんぜんちやいますやん」

白銀屋 「OH！S O いえば、『o n t e m b a a r（おんてむば〜）』といえば、六兵衛、

うちの奉公娘のお妙デス」

六兵衛 「はい？お妙さんがどうかしましたか？」

白銀屋 「ソレが、お妙は、正月S O S O から、行方フメイ」

六兵衛 「え？」

白銀屋 「白銀屋、大サワギ。テンヤワンヤのシツチャカメツチャカ。結局、奉行所に届けたモルヒネ」

六兵衛「はあ」

白銀屋「S Oしたら驚いたんゴ。お妙らしき女性がフグ食べてシヨクチュードクでデス（死）デス」

六兵衛「デスデス？」

白銀屋「死んでたデスデス」

六兵衛「そら、えらいことですな…」

白銀屋「S Oよ！またビックリしたのが、お妙の死体の行方アルヨ」

六兵衛「え？どういことですか？」

白銀屋「奉行所に聞いたらもう死体はすでに引き取られたというアルヨ。謎のある男が死体をもつていったアルヨ」

六兵衛「・・・なんか中国語になってませんか？」

白銀屋「だからお妙の死体はもうないアルヨと奉行所にいわれたアルヨ」

六兵衛「そうなんですか」

白銀屋「死体ないアルヨって、でも、死体がないのか？あるのか？わからんアルヨといったら、いや、だから、死体ないといっているアルヨ、と奉行にいわれて、死体ないアルヨといっているアルヨって…ないのにアルヨってつけたらあるように聞こえるアルヨって…」

六兵衛「ややこしい！むりやり語尾にアルヨをつけるからややこしいんですよ。ないんですね？要するに。死体はなかった」

白銀屋「そうアルヨ。お妙、とてもエエ子。愛郷あった。気立て。よかった。フグ食べて、最後だけ、『o n t e m b a a r（おんてむば〜）』ジャガタラ！」

六兵衛「あ。また南蛮語っぽくなった」

白銀屋「というわけで、お妙の菩提をトムライイに、イマからうちの氏寺のダイ蓮寺にいくキニーネ」

六兵衛「そうですか」

白銀屋「 Dank！スラム Dank！」

白銀屋、高らかに去る。

六兵衛、深々と頭を下げて見送る。

六兵衛「悪いお人やないけどな…。白銀屋は長ない気がするな。やっぱ世襲はあかん。世襲は…って、こんなことしてる場合やなかった！わいは龍法寺にいかなあかんねん。なんせ、これを手にいれたからな」

六兵衛、懐から箱を取り出して、中を見る。ひとり、うなづいて、去る。

【第3幕】 龍法寺

天善、寺の中で読経を上げている。こたつ、火鉢がある。外から、ほっかむりをした和泉がやって来る。

和泉「もし」

天善「はい？」

和泉「天善さまですか？」

天善「天善は拙僧であるが：（扉を開ける）：おや？もしかしていつぞやの？」

和泉「中に入っても？」

天善「どうぞどうぞ。えろう早い時間にきましたな。またなにかご所望かな？また若い女の鬘？最近、流行風邪で、死体が大漁だね。今日は老婆の髪も幼女の髪もありまっせ。あ。男もいまっせ。若衆の髪もあるし、坊主の髪もありまっせ」

和泉「坊主は髪ないですよん。今日は鬘を買いにきたんやおまへん」

天善「切指？何指でつか？親指？小指？薬指？若い女の人差し指はいま売り切れでね」

和泉「そやなくて。このあいだここで買った鬘のことです」

天善「はい？」

和泉「あれ、誰の髪でつか？」

天善「なんでそんなことを聞きまんの？」

和泉「あの髪を、ある男に渡して、それから様子がおかしいんですわ」

天善「ある男？」

和泉「黒金屋の手代の六兵衛という男ですわ。あなたのご友人の」

天善「え？六に？」

和泉「そう（ほっかむりをとく）。私は富田屋で囲（かこい。遊女のクラス）をやってる和泉とい  
います」

天善「ああ。あんたが富田屋の和泉やったか：小輝からええ女やと聞いていたが、なるほど。これ  
はお噂以上」

和泉「お愛想さま。一週間ほど前に、あなたが友人の六さんが気落ちしてるから、慰めてやってほ  
しいと、馴染みの小輝さんにいうて、それで小輝さんが使命したのが私です」

天善「それはそれは。お世話になりましたな」

和泉「それがそうでもなくて。結局、なにもなかったんです。あの夜は」

天善「あら？六のやつめ。こんなええ女に恥をかかせおって。それは、すまんこってすな」

和泉「それで、このままなんもないとあつては和泉の名折れということで、再会の誓いとして、さ  
つそく、この龍法寺で買った鬘を心中立の証明として渡したわけですわ」

天善「：」

和泉「それから六さんの様子がおかしくなつて」

天善「おかしなつた？」

和泉「翌日、いきなり富田屋にきて、『ありがとうございました。やつぱり髪はお返しします』と  
返してくれたんやけど、それ以来、富田屋に日参するようになって、箱の中の髪を匂いにくる」

天善「あちゃあ：」

和泉「興味関心があるのは箱の中の髪だけですわ。わたしのカラダには指一本ふれまへん。いっぺ  
んだけ、わたしの髪の匂いを嗅いだんですが、六さんは『おかしい。箱の中の髪と匂いがちやう』  
といひましてな」

天善「そりやちやうわな。あれはここで買った髪やさかい」

和泉「『箱の中の髪は香を炊いてるからちやいますか？それに、最近、うちは鬢付け油を変えましてん』とかなんとかいってごまかしたんやけど…とりあえず、うちの部屋にきて、なんにもせえへん。ずっと箱の中の髪の匂いを嗅いでます。それで、もう1週間通いづめです」

天善「あいつ、このごろ、ここけーへんな思たら、そんなことしとったんか…」

和泉「毎晩毎晩やつてきて、えろう熱心に髪の匂いを嗅いでるから、いろいろと気になって、昨夜、六さんと話をしました。じつは恋人のお妙というんがいて、心中しようとして失敗したと。恋人だけが死んでもた。それから寝ても覚めても恋人のことを考えてしまう。恋人のことが忘れられへん。ところが、和泉からもうた、この箱の中の髪の匂いを嗅ぐと、妙に気持ちが悪くんと。なんやわからんけど、それで、ついついここに通ってしまうと…」

天善「ど変態やな」

和泉「それで不思議に思って、ここにきたわけですわ。これ、誰の髪でつか？」（箱を取り出して髪を見せる）

天善「ああ…お察しの通り。それは六の恋人のお妙さんの髪や。白銀屋の女中でな。お妙はうちで葬式だったんや。六に依頼されてな」

和泉「えらいことしまんなあ、お前さん。ほな、友人の恋人の髪をうちに売ったってわけですか？死体から切り取って」

天善「『肉は枯れ皮は破れてみちのくに姿浅まし小野の野晒し』…あの絶世の美女の小野小町も野ざらしにされれば、単なる白骨死体になるばかり。人間みんな、死んでもたら骸になるだけや。なんでも利用できるものは利用したらええ」

和泉「すごい男やな…でも、あんたよりすごい男は六さんですわ」

天善「？」

和泉「いや、髪なんてどれも一緒や思ってたけど、死んだ恋人の髪やってことに気付いたんやから。まだ気づいてはないけど、直観でなにかわかってるんやな。ほんまに恋人に心底、惚れてたんや。恋の一途さや。すごい一本気な男や…気に入った！わたしは六さんに惚れた！」

天善「え？まさかの急展開…」

和泉「そうなんよ。じつは、うち、六さんに惚れてしもたんよ。そうとなったら、こつからは恋の相談ですわ。どないしたらええです？死んだ女のことを忘れられない男を、なんとか振り向かせる方法ってのはありますか？」

天善「なんでわしがそんな恋の相談なんかのらなあかんねん」

和泉「元はといえば、あんたが六さんの恋人の髪なんかを切って売るから、こんなことになったんです」

天善「そういうもんなんかいな？女の理屈はわからんなあ…」

和泉「とりあえずなんとかしてください」

天善「無茶振りやな。うーん…死んだ女のことを忘れられへん男を振り向かせる方法なあ。奥の手やが惚れ薬ちゆうんがあるけどな。イモリの黒焼きや」

和泉「イモリの黒焼き？？そんなん、ほんまに聞きまっか？？高津さんに売ってますがな？」

天善「あかんあかん。高津さんのはここだけの話、ニセモンや。あれはただのイモリを捕まえてきて黒焼にしただけなんや。それやと薬の効き目があらへん。ほんまに効かそう思たらオスとメスのイモリが交わってるところを捕まえるんや。そこを無理やりに引き離す」

和泉「かわいそうに」

天善「しゃあない。そうやないと効かへんからな。イモリちゆうんは淫情の強い生きもんでな。引

き離そうとしても必死になりよる。そいつを無理矢理に引き離して別々の素焼の壺へ入れて、これを蒸し焼きにするんや。オスはメスのことを思つて、メスはオスのことを思いながら蒸し焼きにされる。こんどきにパツと蓋を取ったときにスーッと立ち昇る煙が、山ひとつ越えても、ひとつになるいうぐらいや」

和泉「ほんまでっか？」

天善「落語ではそういう風にいわれてる。そないして作ったイモリの黒焼の、そのメスの方を自分の体につけて、オスの方の黒焼を、六兵衛に振り掛けるんや。そしたら向こうから自然と慕い寄つて来る。これがホンマモンのイモリの黒焼や。わしにいうたら、なんとか工面できんこともないけどな」

和泉「いろんな商売やつてはりまんなあ」

天善「貧乏寺でなあ。いろいろ手広くやらなあかんねん。多角経営や」

：とそのタイミングで、六兵衛が来る。

六兵衛「おおい！天善！天善！天善はおるかあ！！」

和泉「あの声は…？」

天善「六兵衛や！なんやあいつ。なんで来た？」

和泉「どないしまひよ？」

天善「とりあえず、隠れてもらお。ここ。ここ。こたつん中に隠れて」

和泉、こたつの中に隠れる。

六兵衛「おい！天善おるか！？」

天善「おるわい。なんや？」

六兵衛「驚くなよ。例のもん、手にいれたんや！」

天善「はあ？？なんや例のもんて？」

六兵衛「ちよつと待て。いま取り出す」

六兵衛、懐中から箱を捕り出し、中からなにやらモノを出す。

六兵衛「これやこれや」

天善「なんやこれ？イモリの黒焼きか？」

六兵衛「なんでそんなもんもつてこなあかんねん。反魂香や」

天善「はんこんこう？」

六兵衛「もう忘れたんかいな？このあいだ富田屋で話したがな。反魂香。死者の霊を蘇らせるという幻の霊香や」

天善「ああ。あの幫間の一人がいうてた奴か」

六兵衛「それやそれや！いろいろと聞いたんやが。このあいだの富田屋の夕霧太夫を偲ぶ会でな。

この反魂香をつけたら、ちゃんと夕霧太夫の霊が現れたらしい。見事な三味線を聞かせてくれたらしいわ」

天善「ほんまかいな？みんなで大酒飲んで、前後不覚に酔っぱらって、なんか見間違えただけのことやろ？一八が、なんか女衆とイタズラしただけやて。戦国の世にも幻術を見せるいうてな。果心

居士なんて男がおったんや。大体、種も仕掛けもあつてな。結局、見破られて太閤秀吉に人心を惑わす不届きものいうことで処刑にされたんや。『神仙戯術』なんて本にもなつとる」

六兵衛「わかつたわかつた。天善先生の御託はもうええて。もうわいは手にいれたんやから。これつけてみよう」

天善「手に入れたて、お前、これ、どないしたんや？」

六兵衛「こうた」

天善「誰から？一人からか？」

六兵衛「そうや」

天善「アホやな！明らかにニセモンやて。匂い嗅いだらわかる。こんなもんだの線香や。毎日香や。そんなばつたもんに手だしやがって…」

六兵衛「ええがな。もう。こうてもたんやから。いろいろと方々に頭下げて前借したけどな」

天善「もう知らんわい」

六兵衛「ほなつけるぞ」

天善「勝手にせえ」

六兵衛「よし」

六兵衛、火鉢に線香をつっこむ。線香に火がつく。

六兵衛「ついた！」

天善「…」

なんにもおこらない。

六兵衛「…」

天善「…」

六兵衛「…あれえ？」

天善「気がすんだか？」

六兵衛「いや、ちよつと待て。なんか聞こえへんか？」

天善「…なんも聞こえへんわい」

六兵衛「…聞こえるて」

火鉢の中の灰が「パチツ」と音を鳴らして崩れる。

六兵衛「ほら聞こえた！いまどつかでパチツっていうた！」

天善「そりや、火鉢の灰の音や！」

六兵衛「あ、そうか…」

天善「ほんま、しょうもないもんに手をだしよつて。情けない男やで。アホ！ボケ！カス！トンマ！ダボ！マヌケ！」

六兵衛「ううう…」

天善「そもそもお妙が生き返つて、次、どないすんねんな？」

六兵衛「もういっぺん心中をやりなোস。今度はちゃんと二人でフグ肝を食べる」

天善「アホか！せっかく生き返つたのに、なんでまた心中で死ななあかんねん！」

六兵衛「あかんか？」

天善「あかんに決まっとるやろ！…それよりな。あの世から甦った女と交わると凄く快感やというぞ。中国・明の小説集の『牡丹燈記』に、美女の幽霊と交わる人間の男の話があつてな。美女の幽霊と交わると、どんどんと精気が吸い取られて痩せ細つて死んでまうちゅう怪奇話やが、おれは、昔からちよつとそれには憧れとつたんや。どうせ死ぬなら、そういう死に方がええと思わへんか？フグの毒で当たつて死ぬより、幽霊と腹上死のほうがええぞ」

六兵衛「おまえの趣味にはつきあつてられんわい」

天善「だれが死姦愛好の色ボケ変態坊主や！」

六兵衛「そこまではいうてない…ああ！あかん！やつぱりおれはお妙のことが忘れられへん！お妙が生き返れへんねんやつたら、おれはもう僧侶になる！」

天善「はあ？？」

六兵衛「(懐中より刀を取り出して)これはお妙の形見の小刀や！これでおれの髪の毛を切つてくれ！おれはお妙の菩提を弔つて余生を過ごす」

天善「アホか。お前の髪の毛なんか大した値にならんわい！」

六兵衛「値？」

天善「いや、なんでもない。髪の毛なんか切るか！お前みたいなもんは僧侶になれん！」

六兵衛「なんでや？」

天善「人間がまるでできてない」

六兵衛「お前みたいな生臭坊主にいわれたないわい！」

天善「坊主なおもて往生をとぐ。いわんや生臭をや」

六兵衛「そんな聞いたことないわ」

天善「どつちにしろ、お前を僧侶にはできん」

六兵衛「頼む」

天善「あかん。それにお前が僧侶になったら、わいの食い扶持が減る」

六兵衛「食い扶持？」

天善「そや。これ以上、同業者は増やしたない。大体、下寺町界限だけで、寺、何軒あると思つてるねん？」

六兵衛「下寺町の寺の数なんかしらんなあ」

天善「二百箇寺以上はあるねんぞ。いくらなんでも寺多すぎや。もうこうなつたら路地裏で人を殺して、その葬式せな、寺の経営もてへんと思つてるぐらいなや」

六兵衛「…わかつた」

天善「なんや？」

六兵衛「ほなら、おれはもう死ぬ」

天善「へ？」

六兵衛「おれはもう死ぬ！お妙もこの世に生き返れへん！お妙の菩提を弔うこともでけへん！もうなつたら、もう死んで、あの世にいつてお妙に会うしかあらへん！」(刀を自分の腹に突きつける)

天善「まてまて！はやまるな！」

六兵衛「なんでや？葬式したらええんやろが？」

天善「アホ！お前みたいな身寄りのない人間、死んでも、だれもマトモな葬式代だすやつなんかおらへん。うちの赤字が嵩むだけや」

六兵衛「いままでありがとうなあ。天善」

天善「聞いてないな人の話!？」

六兵衛「腹より首の方がええかな?」(刀を首にもつてくる)

天善「まてて!」

六兵衛「いや、心臓がええかな?」(刀を胸にもつてくる)

天善「はやまるな!」

六兵衛「やっぱり腹やな、腹にしよ」(また刀を腹にもつてくる)

天善「わかったわかった!：そないまでいうんやったら出家させたる」

六兵衛「え?」

天善「出家させたるて」

六兵衛「ほんまか?」

天善「ああ。そのかわり、出家にも準備がいるわい。いろいろと片づけならん用事もあんねん。今日の夕方に、もういっぺんここに来い」

六兵衛「そうか!ほな、わし、僧侶になつてええんやな?」

天善「ここで死なれて、赤字の葬式やるよりましや」

六兵衛「ありがとう。ありがとうな、天善」

天善「ええい、ええわい。気持ち悪い。それより、とりあえず、もういっぺん出直して夕方に来い」

六兵衛「そうか。わかった。ほなまた夕方に来るさかい。おおきに。ほなな」

天善「はよいいね」

六兵衛、喜んで帰る。少し経つてから、こたつから和泉が出てくる。

和泉「：どういうことですか?惚れた男に出家されたら、うち、困るんですけど?」

天善「そうやない。ええ名案を思い付いたんや」

和泉「名案?」

天善「あのままやったら、六兵衛はほんまに死にかねへん。お妙に未練がありすぎる。要するに、ちゃんとお別れが必要なんや。そこで、お妙を化けて出てくるようにする」

和泉「え??」

天善「計画はこうや。おれがいまからお妙の棺桶をあばく。死体を持つてくる。それを動かす」

和泉「ええ!？」

天善「声色は和泉、お前がやれ。それで『もう私のことは忘れてくださいまし。そうでないと私はいつまでたつても成仏できません。新しい女性を作つて恋をしてください』と、そうやってちゃんとお妙と六を別れさすんや」

和泉「そんなことで、うまいこといきまつか?」

天善「任せとけ。わいはこれでも竹本座の天才人形遣いといわれた、あの辰松八郎兵衛に人形の遣いを習つたこともあるんや。死体も人形も似たようなもんや。まるで生きてるかのように操つてやるわ。やれいうたらカンカン踊りかて躍らせたるで」

和泉「まあ、あの六さんの恋風邪を治すには、それぐらいの荒療治はあるかもしれへんなあ」

天善「そういうことや」

和泉「死体、腐つてまへんか?死んで一週間ぐらいたつてまっせ?」

天善「大丈夫。真冬や。うちの寺の死体はなるべく保存状態をようしてるんや。冷たいところにおいとんねん。もし、なんかあったら売れるようにな」

和泉「生臭坊主やのに死体はなかなか生臭にはならへんと」

天善「うまいこというなあ」

和泉と天善、去る。灯りが暗くなる。夕刻。雨が降り出した。六兵衛がやってくる。

六兵衛「まいど！天善、きたぞー！なんや雨が降ってきたわい。しかも雷雲まで鳴り出して、冬の雷鳴や。あそこの雨雲とか真つ黒やがな。これは大雨になりそうやな。気味悪い夕方やなあ…って誰もおらへんがな。おいおい。どこいったんや、天善のやつ…（しばらくぼーつとして）六兵衛。ふと思ひ出す）あ。そや。もういつペン反魂香やってみよ。そういや、お妙は寝起き悪かったからなあ。血のめぐりが悪いんやな。反魂香1本ぐらいやとあかんのかもしれん。一気に5本ぐらいやったれ」

六兵衛、反魂香をつける。

六兵衛「めつちや煙でてきた。お妙、でてきてくれ。もういつペンおれと心中やりなおそう。今度はおれもフグの肝食べるから」（合掌）」

突如、雷鳴！

六兵衛「わあ！！雷や！！」

真つ暗闇になる。そして大雨。

六兵衛「ああ。あかん。本格的にふってきたんや。なんや真つ暗になってしもた。灯り、灯り…」  
灯りがつく。ふと、見ると、お妙が立っている。その後ろには黒子の姿をした天善と和泉がいる。しかし六兵衛には天善と和泉はわからない。

六兵衛「うわあ！！出た！！…反魂香か！？反魂香が効いたんか？」

以下、お妙は黒子の天善に手足を動かされて、黒子の和泉が声色を変えてお妙のセリフをいう。

和泉（声色をちよつと変えて）「おひさしぶりどすな〜！六さん、元氣〜？」

六兵衛「わああ！！しゃべった！！」

和泉（お妙）「そりや、喋りますわ。一週間ぶりですな」

六兵衛「おお。お妙、甦ったんやな…ん？しかし、なんか声が変わやな？」

和泉「え？変？？」

六兵衛「なんか聞き覚えがある声やが…お妙、そんな声やったか？」

和泉「え？いや、久しぶりの発声やから声がちよつとおかしいのよ。正月早々、冷たい道頓堀に飛び込んだから風邪を引いたみたい。えへへ。げほげほげほ」

六兵衛「おお。そうか。可哀想にな。道頓堀も冷たかったもんなあ。しかし、お前ひとりが死んでから、わいは寂しゆうて寂しゆうてたまらんかったんやで。ほんまに会いたかったんや。そっちの具合はどうや？」

和泉（お妙）「え？そっちの具合？」

六兵衛「そや。そっちの様子や。あの世や。冥途や。極楽とか地獄とかあるがな」

和泉（お妙）「ああ。極楽とか地獄ね。うん。なかなか快適でつせ。三途の河をちよつと覗いたらフグがおりましたわ」

六兵衛「フグ？」

和泉（お妙）「こそ。わたしが二人して食べたフグですがな。フグは私らに食べられて殺されてしもたから、あっちの世界にいつてしまったんですわ」

六兵衛「ああ、そうか。そないな風にいわれると、わしらもフグには、ちよつと可哀想なことしたかもしれんなあ」

和泉（お妙）「まあ、でも元気に泳いではりましたよ。ただ、このフグは閻魔さまに裁かれました」

六兵衛「フグが裁かれた？なんでや？」

和泉（お妙）「そりや、私を毒で殺した罪ですがな。私を殺したフグ。これがほんまのフグ戴天の敵いうやつですわ」

六兵衛「えらいこつちやなあ。んで、どないなつたんや？」

和泉（お妙）「閻魔裁判所で、フグがいうにはですな。『フグいうんは美味しい魚やけど毒も持つてるもんや。それを食って死んでしまうのは、食った人間の運が悪かっただけ。実際、フグ食っても当たらんやつもあるわけやから。当たるも八卦、当たらぬも八卦。わいに過失はない。だからわいは冤罪や』いうんですな」

六兵衛「なるほどなあ。フグのいうことにも一理あるなあ。でも、そもそも毒もつとるというところが不穏やないか。美味しい魚なだけやつたらええのに」

和泉（お妙）「そうなんですわ。それで閻魔さまは『よし。わかった。ではいまからお前はフグを食え』と。『フグを食って無事やつたら許す。もし毒に当たつたら罪人や』と」

六兵衛「それでどないなつたんや？」

和泉（お妙）「フグ、フグ食べて、毒に当たつて死んでしもたんですわ。これぞまさに因果応報。天網恢恢疎にして漏らさず。こつちでは近年稀に見る閻魔さまの名裁きやいうて、地獄瓦版の号外にもなりました。ただ、可哀想なのがフグのお福さんでね…」

六兵衛「お福？」

和泉（お妙）「フグの恋人のお福さんですがな」

六兵衛「フグに恋人おつたんや？」

和泉（お妙）「そりやいますよ。私を殺したフグはズボラ屋のジヘイで、その恋人がお福。お福さんもジヘイさんがフグで死んだから、後追いフグをしようと思つたんやけど、どうしてもできなくて：結局、尼フグになりました」

六兵衛「尼フグ？」

和泉（お妙）「フグの尼さんのことですがな。この二人の馴れ初めもいろいろあつてね…そのうち歌舞伎とか人形浄瑠璃にでもなるんちゃいますか？『不俱の戴天お福心中』とかいう題で」

六兵衛「あの世で意外とおもろそうなとこやな」

和泉（お妙）「ところで、六さん」

六兵衛「なんや？」

和泉（お妙）「こんなことをいうのは心苦しいんやけど、もうお妙のことは忘れてください」

六兵衛「なんや？いきなりなにをいいたすんや？せつかくこないしてまた会えたというのに」

和泉（お妙）「六さんがわたしのことを忘れずにいてくれるのは嬉しいでつせ。せやけど、そうや

つて忘れずに想いを募らせると、私はいつまでたつてもちゃんと成仏できないよ。このままやとずつと三途の河におらなあきません。三途の川縁は寒いんでっせ。道頓堀川よりよっぽど底冷えしますわ。だから早よ新しいええ恋人を見つけてください。わたしのためにもお願いしますわ」

六兵衛「そうか？でもなかなかおまえのことが忘れられへんのや」

和泉（お妙）「ふーん…ほんまにそうでつか？」

六兵衛「え？」

和泉（お妙）「そんなんいうて、じつはもう一週間ほど、ずっと宗右衛門町の富田屋の和泉とかいう女のところについてますやんか！？」

六兵衛「なんでそれを！？」

和泉（お妙）「ちゃんとあの世から見てますねや」

六兵衛「いや、ちゃうんや…その、和泉の髪が、ええ匂いでな。なんや知らんけど落ち着くんや。お前の髪とそつくりの匂いしてるんや」

和泉（お妙）「どうだか。大体、男はね。『口元が初恋の女に似てる』とか『おれには忘れられない女がいて、お前はそれに横顔がそつくりなんや』とか、そんな感傷的なことをいって、別の女に近づくもんですわ。この浮気もん！！」

六兵衛「ひい！？」

天善「役に入りすぎや！？どっちの立場でものいうてるんや！？」

和泉（お妙）「いや、冗談です。べつにええねんよ。死んだもんに未練を残されると、そつちのほうがおほんまに困るねん。その髪の毛の主の富田屋の和泉も多分、あなたのことが…（照れる）きやつ！好きでっせ！（恥ずかしさで天善の背中を殴る）」

六兵衛「え？そんなんやるか？」

和泉（お妙）「恋に一途な男に女は惚れまっさかい！（いいながら照れ隠しに天善の背中をバンバン殴る）。そのひとと添い遂げてやってください。でないと化けてでまっせ！髪の毛を逆立てて、血まみれになって、青白い顔で、鬼婆のようになって、化けてでてやるうう！！」（いいタイミングで雷鳴。寺もまた真っ暗に）

六兵衛「ひい！！！」

灯りがつく。お妙、和泉、天善はいない。六兵衛だけがうずくまってる。反魂香はまだ煙っている。しばらくして、天善が悠然と登場する。

天善「ん？六兵衛？なんやもう来たんか？」

六兵衛「うわああ！」

天善「なんやなんや！？どないしたんや？」

六兵衛「天善！？あれ？お妙は！？お妙は？？」

天善「お妙？」

六兵衛「反魂香が効いたんや！？お妙の霊が甦ったんや！？」

天善「はあ？？なにいうとるんや？だれもおらんぞ。お前、酒でも飲んできたな？それより出家するぞ。さあ、頭出せ。裸になれ。もう全身の毛、剃ったる。全身つるっばげや」

六兵衛「いや、ちよつと待て。わい、やつぱ僧侶になるんやめるわ」

天善「はあ？なんでや？」

六兵衛「出家してもあかん。わいに想いを残されると、お妙は成仏できんらしい」

天善「うーん。まあ、それはそうかもな」

六兵衛「それよりも富田屋の和泉と新しい恋をはじめないかん。そうでないとお妙に化けて出てくるといわれた」

天善「なにいつてるんかようわからんが、富田屋の和泉は、ええ女と聞くな。お前が新しい恋をするのは賛成や。よし。行け。いまから富田屋行け」

六兵衛「え？いまからか？」

天善「『一度は思案、一度は不思議、二度飛脚、戻れば合わせて六道の冥途の飛脚』や。恋は迷うてたらあかん。とりあえず行動や。妙に考え出すと、血迷って、彷徨って、冥途にいつてまうど。思い立ったが吉日。行け行け。わいも後から富田屋行くから。それにおれも一週間ぶりに小輝と会いたい。また昨日も起請が届いてなく。見るか？」

六兵衛「いらんわい」

天善「ほな、いけ。うまいことやれ。和泉と寝て、お妙を成仏させてやれ。金はわしが出したる。貸しやけどな」

六兵衛「わかった。ほなくわ。まだ雨ふつとるな」

天善「雨ぐらいなんじやい。いけいけ」

六兵衛、去る。和泉がこたつから出てくる。

和泉「えろううまいこといきましたなあ」

天善「ふふふ。我ながら見事な人形使いやった」

和泉「人形やのうて死体でしょ？」

天善「いやあ、しかし、なかなか和泉の声色もよかったな。名役者や。よ！和泉屋！」

和泉「そうでつか？ まあ、遊女なんて商売は役者やないとできまへんわ」

天善「うむ：そういう意味では坊主も役者でないといけんぞ。ぜんぜん哀しくもないのに哀しい顔して仏さんの前で読経せないかんのや：って、こんな無駄話をしてる場合やなかったな。はよう富田屋行って、六兵衛迎えんと」

和泉「そうね。でも、お妙さん、どないしまんの？」（こたつをめくると、そこにお妙の死体）

天善「さすがに、二人がかりでないと、なおせんぞ。明日、また二人で元に戻そ。いまはここにいとこう」

和泉「誰かけーへん？」

天善「大丈夫やろ。裏の畑の爺さんが死にかけなんやが、たぶん、あと三日は持つ。今夜は葬式はないわ」

和泉「恐ろしいこといいはりますわ」

天善「それよりも富田屋に急がな。お妙の死体を動かしてカラクリ人形芝居みたいなことまでしたんやからな。ちゃんと六兵衛を惚れさせろよ」

和泉「恋のむつごと四十八手。閨に入ればこつちのもんです。和泉の三所攻めのくじりで、果てん男はいやしません。官能の極楽浄土へと誘いますわ」

天善「恐ろしいこといいはりますわ。行こか」

和泉、天善、傘をさして去る。お妙がこたつの中で眠っている。反魂香はまだ煙っている。雨がまとも激しくなる。稲妻。すると、ひよっこりとお妙が起きてくる！なんと反魂香がきいた！

お妙「うーん。よう寝た。あれ？（こたつを覗いて）え？（お妙さんを見つけて）え？（仏さんを発見して）え？？」

寺！？え？わたし、死に装束やか！？（頭に手をやって）あれ？？髪の毛もあらへん…思いだした！六さんと心中しようとして、それで、失敗したんや！そうや。わたしだけフグの毒に当たって死んでもた…。いとしい六さん、どこいったんやろ？…（鼻で周りの匂いを嗅ぎだす）でも、この寺、六さんの匂いがあるわ。さっきまでここにいたんや！匂いはあつちのほうに向かつてる。わたしをおいて、六さん、どこ、いったん…？」

お妙も退場する。宗右衛門町へ。

そこへ入れ違いに駆け込んでくる、白銀屋の旦那さん。

白銀屋「OH！危ない！…なんや、お妙によく似たontembaa娘デスね…  
つて、え！？お妙！？生き返った？んなアホなンセンス。アベのセーメーでもおらな、そんなこと起きんはズック。クワバラクワバラ」

白銀屋の旦那さん、お妙と逆方向に去りながら。

白銀屋「あの世はアノ世。この世はコノ世。行ったり来たり、オーライできるもんやないアルヨ。  
あ。ないアルヨというのは、ないという意味アルヨ」

白銀屋の旦那さん、去る。

■幕間劇③ オフクとジヘイ「四国の海」

オフク「私が捕まったフグ料理の店・ズボラ屋は、結局、倒産しました。ジヘイさんを食べた若い女性客が、ジヘイさんの毒に当たったそう。食中毒を出したお店は営業停止。そのまま主人はトングラして、イケスの中にいた魚たちも、道頓堀川に放たれたのです。私は無事に大阪湾に帰ることができました。そして、そこでジヘイさんの子供を産みました。この子です（フグのぬいぐるみを出す）。名前はフクコ。女の子です。私は、この世の無情を感じて、出家して、いまは尼フグです。そして、この子と一緒に、ジヘイさんの菩提を弔うために、四国の海を流離ってます。なんでも四国には、88カ所のお遍路があつて、それを巡ると、死者に出会えるとか。私は、もう一度、ジヘイさんに会いたいと思って、四国の海を巡っているのです」

オフク「ああ。ようやくついたわ。ここが最後の88番目のお寺・大窪寺の近く。海の中からだけど、お参りしましょう。これで本当に、ジヘイさんに会えるのかしら。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

厳かな音楽が流れる。應典院・阿弥陀如来がライトアップされる。

オフク「ああ！！なにやら厳かな曲が流れて、阿弥陀さまが光って輝きだした！」

阿弥陀如来「オフクよ」

オフク「ああ。阿弥陀さま！ほんとうに阿弥陀さまに会えるなんて」

阿弥陀如来「お前の、亡きジヘイへの供養の思いを聞いて、おもわず出てしまったのだ。こんなことはめつたにない」

オフク「ありがとうございます」

阿弥陀如来「どうしてほしいのだ？」

オフク「一目でいいので、ジヘイさんに会いたいです。この子をジヘイさんに合わせてあげたいのです」

阿弥陀如来「ジヘイは、あれから地獄に落ちた」

オフク「ええ？！」

阿弥陀如来「お妙という女性を殺してしまったのだ。殺生の罪は重い、地獄の閻魔大王の裁きを受けて、いまフグ地獄にいる」

オフク「なんですか？そのフグ地獄というのは？」

阿弥陀如来「いけばわかる。いってこい」

オフク「あーれー」(ぐるぐるぐるぐる)

(暗転)

オフク、くるくると舞台からはけて、またくるくると戻ってくると、ジヘイがいる。

オフク「ジヘイさん！」

ジヘイ「ああ！オフク！なんでこんなところに！？？」

オフク「かくかくしかじかで」

ジヘイ「阿弥陀さまのおかげで！ありがたい！南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

オフク「これがあなたの子よ！フクコよ」

ジヘイ「おお！！これがおれの子。会いたかった！」

オフク「それで、一体、フグ地獄ってどんなどこなん？」

ジヘイ「うむ。毒がたっぷりはいったフグを食べんといかんという地獄なんや」

オフク「死んでまうやないですか？」

ジヘイ「それが死ぬんやけど、また甦る。そして、またフグを食べんといかん」

オフク「つらい地獄！」

ジヘイ「そうなんや。だから、いまはストライキで、フグを食べへんでいる」

オフク「ストライキ！？あなかは減らないんですか？」

ジヘイ「減る。しかし、死ぬことはない。これはこれでつらい。要するに餓鬼地獄やな」

オフク「毒フグを食べるか？餓えに苦しむか？」

ジヘイ「しかし、フグを食べて無事だと、極楽にいけるんや」

オフク「ああ！可哀想な！ジヘイ！どうしたら極楽にいけるのかしら！」

ジヘイ「わからん。なんとかフグの毒を無毒化できればええんやが・・・」

オフク「あ！」

ジヘイ「なんや？オフク」

オフク「これ！（塩を取り出す）」

ジヘイ「なんやこれは！？」

オフク「塩よ！6年間、塩漬けにしたら、フグ毒は無毒化されて、食べれるようになるわ！」

ジヘイ「おお！でかした！オフク！助かったぞ！これでこれから6年間ストライキして、フグを塩漬けにしたら、極楽にいける！」

オフク「ああ！よかったわ！これも阿弥陀さまが私たちを合わせてくれたから」

ジヘイ「ありがとう！オフク！おれは先に極楽にいつて、待ってるぞ。フクコと一緒に仲良く暮らしてくれ」

オフク「はい」

ゆっくり暗転。

ジヘイ、いなくなる。オフク、倒れている。阿弥陀さまが見つめている。

オフク「ああ！阿弥陀さま！ありがとうございます！地獄のジヘイに会って、塩を送ることができました。これでジヘイも極楽にいけます！すべては阿弥陀さまのおかげです。南無阿弥陀仏波阿弥陀仏・・・」

また厳かな音楽が流れる。阿弥陀さま、光って。暗転。

(暗転)

【第4幕】 南地・宗右衛門町・富田屋

三味線、男女の嬌声。いつもの富田屋。屏風が中央にあり、右側に布団があつて、和泉と六兵衛がいる。ふらふらとお妙が部屋に入ってくる。時すでに遅し。すでに和泉と六兵衛は情交のあとだった。

六兵衛「すごかったわ…わい、こんななんはじめてや…」

和泉「…わたしもすごかったわ」

六兵衛「不思議やつたんや。お妙のことを忘れよう忘れようとしても忘れられへんかったのに、和泉の髪の毛の匂いを嗅いでると、妙に気持ちが落ち着いてな」

和泉「…そうね」

六兵衛「わしと和泉と、二人は、いずれ、こうなる運命やつたんかもな」

和泉「運命…」

六兵衛「そや。これは運命の恋や」

和泉「そんなんいうて、どうせ、他の女にもそんなこというてるんでしょ？」

六兵衛「んなことない。わいはそんな器用な人間やないで」

和泉「どうだか…」

六兵衛「疑うんか？わいは惚れたらまっすぐな男なんや」

和泉「六さんが一本気のある男なんは信じてますけど…せやからうちも惚れたんやし」

お妙が聞き耳を立てる。

六兵衛「そや。おれは一本気な男なんや。よし。決めた！わしはお前に惚れた。身請けしよう！」

和泉「え？なにをいいだすんのん？…」

お妙、ショックのあまりに白目。

六兵衛「いや。もう決めた。身請けする」

和泉「そんな急な…」

六兵衛「いやか？」

和泉「いやなことない」

六兵衛「ほな嬉しいか？」

和泉「そら嬉しいけど…」

六兵衛「ほならええやないか！ いや、わいはじつは黒金屋のさんから姪と結婚せえいわれてるんやけどな。しかし、その縁談はきっぱり断る。黒金屋もやめる」

和泉「え？黒金屋を？」

六兵衛「そや。じつは前々からわいは独立して、自分の腕ひとつで、商いをやってみたかつたんや。一人前の商人として、大坂で名を挙げたい。商売は信用第一。これからは一度でも言葉にしたことは死んでも守る。和泉、お前、最初にわいとおうたときに自分の髪を渡して心中立してくれたなあ。今度はわいがやろう」

六兵衛、お妙の小刀を取り出して、髪を切って、和泉に渡す。



和泉「あら？六さん、えらいところで寝てるわね…ふう。かわいい人」

和泉、寝てる六兵衛の隣に座って酒を飲む。その様子を見て、お妙の独白。

お妙（独白）「ひらめいた！そや！こうなったらわたしも復讐してやる！眼には眼を。歯には歯を。裏切りには裏切りを。あの和泉にのりうつって、目の前で六兵衛を裏切ってやればええんやわ！」

屏風から出て、和泉の前にいきなりお妙現れる。和泉、驚く！？

和泉「だれ！？…って、え？あんたは…お妙さん！！なんでここに！？生き返った！？…え！まさか、あの反魂香がほんまに効いたん！？」

お妙、和泉の腕をとる。

和泉「なにをしまんの！？あんたはもう死んでるんでっせ！幽霊なんでっせ！」

お妙「そうです。幽霊です。せやから、いまからあんさんの中にのりうつりますわ！」

和泉「え？！」

お妙「とう！！！」

お妙、和泉の首に手刀をうつて気絶させる。和泉、うめき声を上げて倒れる。お妙、和泉の手を握る。

お妙「眠ってるあいまに霊だけ入るわ。あなたのカラダを借りるわよ」

手を握っていたお妙が倒れる。和泉の中にお妙が入る。和泉が起き上がる。以下、和泉がお妙が入ったように演じる。

和泉（お妙）「…やった！！うまいこといった！のりうつってやったわ！…って、遊女って着物大変ね。いろいろと打掛が多くて、なにこれ？…（胸を触る）うわあ。わたしより胸があるわ。くやしい…。（お尻をさわる）お尻はわたしのほうが小さいわ（下半身を除きこむ）へえ。こんな感じなんや…って、こんなことしてる場合やなかった」

和泉（お妙）は、ひとまず自分の死体（お妙）を布団で隠す。

和泉（お妙）「さて、カラダをのりうつたはいいけど、だれと裏切ってやろうか…」

そこにかなり酔った天善が登場。

天善「ああ！酒がうまいねえ。今日はひとり酒ですよ。そう！小輝とは別れましたよ。ああ！別れた！なんやねん、あいつは。起請文を仏壇屋の源兵衛、下駄屋の喜六、指物屋の清八と3人に

も渡してやがった。3人にも!…まさかの裏切りですわ。いや、まあ、わかっちゃいましたけどね。所詮、遊び女。せやけどこんな起請文もうたら多少は期待するやん? (たもとから起請文を取り出して数える) ひとつ、ふたつ、みつつ…全部で30枚や。30枚! どや! 『心中天の網島』の紙治と小春でも29枚やで。それをわいと小輝は1枚上回ってるんや。さまあみさらせ!…いや、しかし、その恋も情も全部ニセモンや! ええい! こんなもん! (起請文を投げようとするがやめる) …つと思っただけ捨てるのはもったいない。紙屑屋に売りつけたろ。ちくしよう。それにしてもおもんない。おもんないから六んとこでも冷やかしにいつたろ…おい! 六! おるか! なんや返事ないがな… (ふと見ると六兵衛が転がっている) と思ったら、こんなところにおるやないか? なに寝とんや? どや? うまいことやってるか? あら? 六? (六兵衛の頬をぺちぺち叩く) あかん。こりや、氣失つとる…ああ。こりや和泉の三所攻めのくじりがよっぽどよかつたんやないか? 氣持ちよすぎて失神。さすが和泉どの。こりや。うらやましいねえ。つて和泉は?」

天善、隣に立っていた和泉 (中はお妙) の存在に気付く。お妙、天善をみて思い立つ。

和泉 (お妙) 「飛んで火にいるなんとやら!」

天善 「なになに? なに? あれ? 和泉どの。ええねえ。さすが! 閨に入ったらこつちのもんとはいつてたが、こりや素晴らしいお手並み拝見。見事、六兵衛を打ち取りましたな。天晴れ遊女の鑑!」

和泉 (お妙) 「ちよつと、天善さん。こつちに」

天善 「はい? はい? なに? なに?」

天善と和泉 (お妙)、2人で屏風の裏に回る。

天善 「なんやなんや? もう祝言でもあげるか? しかし、六兵衛も単純な男やでな。恋人が亡くなつて一週間もたつてないのに、もうお前さんとこんなことになってるんやから…」

和泉 (お妙) 「お静かに。わたし、あの六兵衛には、もう愛想つかしましてん」

天善 「へ? なんでや?」

和泉 (お妙) 「思っただ以上に薄情もんですもん」

天善 「薄情もん?」

和泉 (お妙) 「心中するまで約束した女性が死んで、まだ一週間も経ってないのに、もう他の女と懇ろになってるんやから…」

天善 「はあ! …すこいこのう。このあいだまでは『恋に一途な男! 惚れた』とかいうといて、いざ心変わりしたら『なによあの浮気男!』というわけかい。げに恐ろしきは女やなあ」

和泉 (お妙) 「うち、それより、前々からお坊さんに興味があつてん」

天善 「は?」

和泉 (お妙) 「よくいうやない。『坊主抱いてみりやかわいいものよ。どこか尻やら頭やら』」

天善 「え?」

和泉 (お妙) 「ええでしょ? 六なんかあつというまに果ててしもて、ぜんぜん物足りなくて。まだカラダがほてつてるのよ。ここは遊郭。男と女がそういうことをするところなんだから」

天善 「あらあ。ええ?? まあ、おれはええけどね。小輝にも裏切られたことやし」

和泉、天善に抱きつく。真つ暗闇になり、スポットライトが舞台脇に。そこにお妙が立っている。

※ここからはお妙のナレーションで進行。

お妙「(ナレーション風) わたしは、このとき、六兵衛へのあてつけのつもりで、天善に抱かれました。思いつきりいやらしい声を、大声をあげて、六兵衛に聞こえるように。六兵衛が起きてきたら、和泉のあえぎ声を聞かせてやろうと、そう思っただけです。愛する人に裏切られる憎しみを味わわせてやろうと。ところが……天善さまって、ほんまにすごかったんですう」

和泉(お妙)「あああ！！こ、こんなのはじめて！」

天善「おりゃあ！！！！まだまだく！！！！」

お妙「(ナレーション風) わたし、こんな気持ちになったのははじめてでした。天善さまったらとっても激しくて男らしくて……我を忘れました。女の喜びをはじめて知りました。死ぬかと思いましたが、そして、そうしていると、六兵衛が目覚めました」

屏風の裏にいた六兵衛、起きる。

六兵衛「んん？？…頭が痛い…なにやらうるさいな…なんの声や？となりか？誰やねん？(屏風の向こうを覗き込む) はあ！！なんちゆうことや？い、和泉と天善があっ！？…」

和泉(お妙)「ああー！いくー！いくー！しにんす！しにんす！」

天善「おりゃあ！！！！まだまだく！！！！」

六兵衛「なんちゆうことや…所詮、廓の女。遊び女よ。恋や愛やといっても、それは商売道具。金儲けの手練手管に過ぎんというわけか…しかし、おれは本気やったんや。お妙を亡くし、今度こそ思ってたんや…」

お妙「(ナレーション風) わたしがあられもない声でよがっているときに、六兵衛はふと懐中の中の刀に気づきました。愛するお妙を死なせ、また新しくできた恋人の和泉にも裏切られた。六兵衛はこのとき、ふと、魔が差しました」

和泉(お妙)「ああー！いくー！いくー！ころして！ころしてく！！」

天善「おりゃあ！！！！まだまだく！！！！」

六兵衛「ちくしよー！なにがしにんすや！そうか。わかった！ほなら、望み通り殺したるー！」

六兵衛、懐中の刀を握りしめて、布団を刺す。天善に刺さる。

天善「まだまだく！！…って、ぐわあっく！！(絶命)」

天善の絶叫とともに舞台照明が灯る。

和泉(お妙)「え！？天善…どうしたの？？うわっ！なにこれ！？血や…(手や布団が血まみれ

になつている)」

六兵衛「し、しもた…（六兵衛。血まみれの布団を見て、茫然自失状態に。手には血まみれの刀。思わず後ろに下がる）」

和泉（お妙）「ちよつと待つて！え？六さんが刺したの！？…えらいことになつてもうた！ごめんなさい！私は和泉やないの。わたしなの！お妙なの！」

六兵衛「ええ！？」

和泉（お妙）「いま、彼女の中にはいつてまんの！」

六兵衛「な、なにをいうてるんや…？？」

和泉（お妙）「ちよつとまつて！いま元に戻るから」

和泉（お妙）、布団をめくつてお妙の死体を出し、手を握る。

和泉、いきなり倒れる（お妙の霊が和泉のカラダからお妙のカラダに戻つた）。

お妙「わたしです！お妙です」

六兵衛「えええっ！？」

お妙「ごめんなさい。天善と寝たんはじつは和泉やのうて、わたしです！お妙です！カラダは彼女のもんを借りたけど、霊魂はわたしなの」

六兵衛「…なんやそれ？」

お妙「幽霊の私が和泉のカラダの中に入つてたというわけ」

六兵衛「のりうつてたというわけか？」

お妙「そういうことです」

六兵衛「なんでそんなわけわからんことしたんや…」

お妙「…あてつけですがな！悔しかったんや。あなたと和泉の仲が、とつてもよくて嫉妬したんや」

六兵衛「そんな…もうお妙、お前は死んでしもたんやで」

お妙「そうや…そんなんわかつてます。でも、悔しいやん。まだわたしが死んで一週間もたつてないのに、もうすでに新しい恋人ができてるやなんて。しかも一緒になろうやなんて…聞かせてください。お妙と和泉とどっちがええんでつか？」

六兵衛「そんなもん比べるもんやないわ。ふたりとも、おれにとつては素晴らしい女性や。しかし、わいはまだ生きてる。生きてる人間は、死んだ人間と一緒にすることはできへんがな」

お妙「…そうですわな」

お妙、和泉を起こす。

和泉「…ん？…あれ？…ここは…きやあ！お妙さん！？」

お妙「ごめんなさい。和泉さん、あんさんの勝ちですわ」

和泉、六兵衛に抱き着く。

和泉「六さん…なんやようわからへん。一体、どないなつてますのん？？」

六兵衛「いや、なんや色々と事情は複雑なんやが、とりあえず、お妙から許しがでたらしい。わいは一緒になつてもええちゆうことや」

和泉「ほんまに？それはよかったけど…（血まみれの布団と天善を発見する）って、え！？なんで天善が死んでまんの！？」

六兵衛「ああ！それや！…わいが思わずカッとなつて、手違いで殺してしもたんや…」

和泉「手違いで殺した！？なんちゆうことを…どないしまんの？これ？」

六兵衛「どないしまんので…わいもどないしてええのんかわからん…。人殺しや。奉行所に名乗りでなあかん。お奉行さんのお裁きや。お白洲いきや…ははは。フグ食べて運が良かったら無罪！とか、そういうわけにもいかんやろな…」

和泉「そんな…折角、恋人の幽霊にもうちらの恋を許されたのに、こんなん別れるんはいやや！」  
六兵衛「わいも和泉と離れたない…せやけど、やってしもた罪は罪や…」

天善、むつくりと起き上がる。

天善「そんな悲観せんでもええで」

六兵衛と和泉「えええ！！！！？」

天善「なんや？」

六兵衛「なんややないがな！？」

和泉「なんで！？思いっきり刀刺さってますけど？？死んだんちやうのん！？」

天善「いやあ、確かに死んだ。けど甦った。あれや。反魂香や」

六兵衛「え！？」

天善「六兵衛、お前が一人からこうた反魂香は、ほんまもんやつたんやな。あれ、寺でアホほど炊いたやろ？その匂いをわしら全員嗅いだがな。それがまだ効いてるんやな。それで死んだけど甦ったんや。たぶん、いまお前と和泉が死んでも、まだ反魂香の効き目があるから、甦るぞ」

六兵衛「そういうことかいな…いや、すまん！天善、申し訳ない！お前を殺そうとか、そんなつもりはなかったんや！（土下座する）」

天善「そんなつもりはないって…思いつき『殺したる』とか叫びながら刺してきたがな。まあ、ええわい。大丈夫や。じつはおれはお前に刺されるまえに、お妙との夜伽が気持ち良すぎてな。

心臓麻痺で死んでたんや」

六兵衛「え？」

天善「腹上死や。ある意味、男の夢やな」

六兵衛「ほ、ほんまか？」

天善「ああ。せやからお前は無罪放免や。死体に刀を刺しただけやからな。死体損傷の罪ぐらいやな」

和泉「たすかった！」

六兵衛「せやけど、そんなもん、どないして証明するねん？」

天善「刀貸せ」

六兵衛「え？…なににするんや？」

天善「ええから」

六兵衛、天善に刀を渡す。天善、指を切る。

六兵衛「うわ！お前、なにをするんや！？痛ないんかいな？」

天善「もう死んどるんや。痛くも痒くもあらへんわい。この指を添えて、あと起請文も書いてな。

『私こと天善は、お妙との靈的交接によつて快樂のあまり昇天。腹上死したによつて六兵衛の刺し傷は無効。その心中立として、この切指を証明とする。天善』。これ、奉行所に見せたらええ。そしたらお前は無罪放免や。それでもまだなんか奉行所がゴチャゴチャいうんやったら、もういっぺん奉行所で反魂香焚け。わしが幽霊になつて奉行所に化けてでてやるから」

六兵衛「そうか…ほならわいは助かるんやな」

和泉「天善さま、恩にきます…」

天善「というわけで、おれは、ぼちぼちちゃんと死ぬから」

六兵衛「そんな…」

天善「泣くな。前にいうたやろ？フグの毒に当たつても死なへんやつもおるし、ちよつと風邪で寝込んでたと思つたらコロツと死ぬやつもおるし、女遊びしすぎて気持ち良すぎて腹上死するやつもおる。人間さまいうんはな。病氣や事故で死ぬんやないで。寿命で死ぬんや。すべて阿弥陀さんが決めてはるんや。それに、おれはあの世に行く前に、妙な出逢い方やが、素晴らしい女性をみつけたんや」

六兵衛「へ？どこに？」

天善、お妙の手をとる。

天善「一緒に死にましょう」

お妙「…はい」

六兵衛と和泉「えええええ！？」

お妙「六兵衛さん、ごめんなさい。わたし、天善さんのことが好きになつてしまいました」

天善「ほら、前に六兵衛にいうたことあるやろ？『牡丹燈記』。美女の幽霊と性交すると、あまりの気持ち良さで死んでまうというやつや。こんな素晴らしい快感やとは思わんかったわい。まさに靈的合一というやつやな。魂と魂の性交や」

お妙「わたしもあんまりの快樂で我を忘れました…」

六兵衛「なんや恋人が寝取られたような。すつこい複雑な気持ちなんやけど…」

天善「まあ、ええやないか！おれとお妙は一緒に死んで、あの世で楽しく暮らす。お前らは今生を楽しく生きたらええ。いずれまた会うんや」

六兵衛「そうか。ほな、しばしのお別れやな」

お妙「勝手にカラダをのつとつてすんまへんでした」

和泉「ええのよ…よく男には中に入られるけど、女に入られたのは初めての経験やったわ」

六兵衛「なんやすごいやらしいことを想像してまうんやが…」

天善「…というわけで、そろそろ、死のうと思うんやが…」

六兵衛「あ。天善。おれ、お前に金を借りとる」

天善「なんや急に？人がぼちぼち死のうとしとるのに」

六兵衛「ほら、この払いとかや。死なれてしもたら、金の返し方がないがな。おれは一人前の商人になるさかい、不義理はせんと決めたんや。このままやったら大坂商人の名折れになる。どないしたらええやろか？」

天善「アホか。死んでしもたら、あの世に金もっていけるわけでもないし、金銀小判も漬物石も同じようなもんや。それにな。お前には、これだけ貸しとるんやが…（左の掌で隠して右の一差指を出すつもりが、その指を切ってしまった）」

六兵衛「あ。指きつてもうたから、指がない」

天善「そうや。もうおれは指も出せん。貸した金の数字も見せれん。せやから借金もなしや」  
六兵衛「さよか。おおきに。天善」

天善「ああ。そんなことより、もうそろそろ反魂香が切れてきたな。眠なってきた」

お妙「わたしも眠なってきました。六兵衛さん、いままでほんまおおきに。冥途を往来してきて、相手は変わったけど、天善さんと二人して、あの世にいきます」

六兵衛「成仏できそうか？」

お妙「できます」

天善「おいおい。僧侶と死ぬんやで。あの世への道行はまかせとけ。近松の『曾根崎心中』やないけど、これぞまさしく『未来成仏疑いなき、恋の手本となりにけり』や」

六兵衛「そうか。ほなな。達者で死ぬ」

天善「ああ。達者で生きろ。達者で死ぬまで」

天善とお妙、手をとって寝る。死ぬ。六兵衛と和泉、合掌。

六兵衛と和泉「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

どこからか鐘の音が聞こえる。男女の嬌声。三味線の音。

劇終



※「道頓堀心中冥途往来」は クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンスの下に提供されています。これは原作者のクレジット(氏名、作品タイトルなど)を表示することを主な条件とし、改変はもちろん、営利目的での二次利用も許可される最も自由度の高いCCライセンスです。